

所詮この世はルッキズム



## 目次

所詮この世はルッキズム	鉛色の世界で、ふたり	余命三か月の君へ
98	32	4

余命三か月の君へ

四月四日

「里美ちゃん、言いにくいんだけど」

その言葉を、私は生まれたときからよく聞いていた。

だが今回ばかりは軽く捉えられない事実が、私の耳を通過する。

「君の余命、残り三ヶ月だ。親御さんに説明がしたい」

主治医の加藤先生の手は握りこまれ、彼の膝の上で力強く震えていた。

私の手は、力無く項垂れていた。

宣告時、母は泣いていた。

父は黙って、床を見ていた。

私の命は、こうしているうちにも尽きようとしている。

私の景色はいつだって、この白く清潔な個室でいっぱいだった。

外では幸せそうに小鳥が歌い、緑が生い茂り、赤黒のランドセルを背負った少年少女があちこち走り回っている。

そんな広い世界とは逆に、六畳の病室は私の人生の全てだった。

神様。次に私を産んでくれるときは、もう少し元気な身体で産んでください。

お父さんお母さん、ひとり娘なのに先に死んじやってごめんなさい。

加藤先生、小さい頃から迷惑かけてごめんなさい。

私は懺悔をし、残り少ない人生がただただ終わるのを待ち、今日も目を閉じ眠った。

四月十三日

私は今日も、白い独房で本を読んでいた。

読書は好きだ。有意義に時間を潰せる。

両親は仕事で忙しく、あまり私のお見舞いに来てくれない。でも月に一回必ず来て、今日は何があったと聞いたり話したりしてくれる。

最初は話すことも楽しかった。だけど、同級生が今どうしているとかの話になりだんだん億劫になって、今ではほぼ寝た振りをしている。健康な同級生の話をされても、何も響かない。

決してそのつもりはないのはわかっている。でも、高校の卒業式とか大学入学とかの話を知ると、

やっぱり自分の体が憎くなるのだ。本来なら私は大学生で、大好きだった英語を勉強したかった。体が元気ならイギリスに留学したかった。友達がたくさん欲しかった。課題をみんなと一緒にやりたかった。

でもそんな簡単なことも、私の体は許してくれなかった。

私はこの体が憎い。辛い。背中に差し込まれる点滴も、たまに血痰が出るのも、ひどい気分だ。嫌だなあ、嫌だなあ。

こんな体のくせにまだ生きているのが、ひどく嫌だ。

「里美ちゃん」

気が付くとゆっくりと扉が開かれ、加藤先生がこちらに微笑みかけてくれた。

「先生、どうしたの？」

「ううん、たまたま病室の前通ったから。元気？」

「ぼちぼち」

「……そうか」

加藤先生は、小さい頃からの主治医の先生だ。

私は幼少期からずっと体が弱くて、しょっちゅう入院を繰り返していた。前の病院で十歳で死ぬと言われた私を十九歳まで生かしてくれたのは、加藤先生のおかげだ。

「里美ちゃん、外に行ってみないかい？」

「そと?」

重苦しい雰囲気を打破するように、先生はわざとらしく明るい表情を作る。

「最近、雑草まみれだった中庭がすごく綺麗になったんだ。パートのおばちゃんたちがボランティアで庭いじりをしてくれて、今はチューリップ、ラベンダー、シバザクラ、マリーゴールド……とにかく色々咲いてるんだ」

「ふうん」

「そんな声出さない。ちょっとだけ一緒に行ってみないか? 花を見るのも療養方法の一つだぞ」

先生が困ったように笑ったのを見て、ちよっぴりいたたまれない気持ちになる。

彼だつて仕事があるはずなのに、私のために時間を割いてくれているんだ。

「わかった……行こうかな」

「本当? よし、じゃあ早速行こうか。立てる?」

「まだそこまで衰弱してません」

入院着を適当に整えて、ベッドの下のスリッパを取り出す。

「よし、じゃあ行こう」

「はあい」

無気力な返事をして、私はのそのそと彼の後ろを歩いた。



「里美ちゃん、見てごらん！ 花がいっぱいだ」

「わかったわかった」

先生は私を連れて中庭にきたかと思うと、私よりもはしゃぎ始めて庭をスキップで回り始める。

この間まで雑草まみれだった中庭はきれいに整えられていて、赤茶色の道路に沿うように多種多様な花が咲き誇っていた。

「雑草がいっぱいだったときは狭く感じたけれど、こうして見ると広いものだね」

先生の言葉に、黙って首を縦に振る。

庭の広さは古民家ぐらいあって、なかなかの広さだった。蝶が飛びいい香りがし、おばちゃん達がベンチでお喋りに花を咲かせている。

「ほら、あっちにマリーゴールドがあるよ。行こう」

私を置いてはしゃぐ先生について回っていた時だった。

少し向こう側の道で同い年くらいの青年が紫のチューリップに鼻を近づけ、ふんふんと匂いを嗅いでいるのが、やけに目に留まった。

目にかかるくらいの前髪と、黒のマッシュヘアが風に揺れる。私と同じ入院着を着ていた彼は、どこか不思議な雰囲気醸し出していた。

チューリップは他にも赤や黄色、白もあったのだ。でも彼は、紫のチューリップに興味を惹かれ優しい眼差しを向けていた。

彼の琥珀色の眼を静かに見つめていると、彼と私の視線ががち合った。

「見過ぎ」

柔和な弧を描いた二重とくちびるは、いやに可愛らしく、そして憐げだった。

チューリップに添えていた手を離し、こちらに向かって歩いてくる。

「ねえ君、名前は？」

青年は正面に向き合くと、表情を変えずに穏やかに話しかけてくる。私は少しうろたえ、三步下がった後に俯く。

「さ、先に教えてよ。だれ？ なまえは？」

久しぶりに家族と病院関係者以外と話したので、声が裏返ってしまう。彼は面食らったような顔をして、小さく吹き出した。

「ごめん、そうだったね。僕は颯。さかもとはやて坂本颯」

「はやて」

「そう。立つに風って書くんだ。で、君の名前を覚えて欲しいな」

だめかなと続ける彼の笑顔に負けてしまい、私は一息ついた後に口を開いた。

「まつながさとみ松永里美……」

一回呟いた私とは対照的に、彼は何回も私の名前を繰り返す。

「さとみちゃん、さとみちゃん……いい名前だね」

「別に、普通じゃない？」

「ううん。雰囲気合ってるなああって思ってる」

私はその言葉に首をひねった。

「どう雰囲気似合っているのかわからないけど……ありがとうございます」

「なんで敬語？ タメ口でいいよ」

「う、うん」

会話したことのないタイプのない雰囲気、私は正直面食らった。爽やかな風貌、聞き心地のいいテクノロジーボイス。先生と両親以外あまり会話をしない私にとって、彼は未知の生物だった。

「じゃあ一緒に回ろうよ。僕花詳しいんだよ？」

彼は有無を言わさずに私の手を取って、先に進んでいく。

「ちょっと、まだ良いとは」

「どうせなら一緒にいよう。僕転院してきたばっかで友達いないんだ」

「……そう」

私も友達がない、という言葉が喉の奥から出そうになる。

私だってそうだ。仕事で忙しい両親に、祖母は遠方の田舎に住んでいるのでなかなか会いに来てく

れない。学校なんて二の次だ。通学もままならなかったし、高校は通信制に通った。大学に行きたかったけれど持病が悪化して、今は余命三か月。

暗い人生だった。私がこうやって悲観している間も、彼は元気にいろんな花を回っては花言葉を並べていく。

「んで、これがペチュニアで」

「もーいいい」

「へ？」

ヘラヘラと笑うこの男の表情は楽天的で、私の癪に障った。

「どうせあなたは長く生きられるでしょ。一時的なものだって言われて、これからはずっと私の知らない所でおじいちゃんになるまで生きるんですよ。私は違う。残り三か月しか生きられない。こんな体じゃ誰も愛してくれないし一緒にいてくれないの」

声が反響して、私の耳をつんざいた。

「三か月よ。私だって花が大好きだし色んな場所に行きたい。この足で駆け回りたいわよ。でもできないの。無理なの。こんな体じゃ死ぬしかないし、こんな体に生まれた自分が憎い。どうせ死ぬのよ？名前なんていらないうわ」

「さとみちゃん」

わざとらしく名前を呼んで私を制しようとする彼に心底ムカついて、私は強く歯ぎしりをした。

「もういい、帰る」

手をすり抜けて、私は病室に向かって走り出した。

走るのはドクターストップがかかっている。ドラマのように美しいひまわり畑を走ったり、ラベンダー畑に行くことだっかなかわない。

でも今は、癪に障るあいつの顔を見ないように下を向いて走った。嫌だった、天真爛漫で明るく、のうのうと生きていそうな彼の顔を見るのが。幸せそうに、これからのことなんて何にも考えてなさそうに笑う彼が。

何もかもが、私の地雷だった。

「もう、いや」

自室の真っ白なシーツに丸まっていると、私の臉からは雨のように雫が零れてきた。

情けなさと忌々しさがこみあげてきて、私は心臓を抑えながら嗚咽を漏らす。

こんな思いを何処かに捨て去りたくて、ただ涙を流した。

四月十後日

私は泣きはらした目を、加藤先生にひどく心配されていた。

「大丈夫か、里美ちゃん。どこかにぶつけた？ それとも、何か菌が」

「平気。そんなんじゃない」

「でも、なにかあったら」

「いいの、気にしないで」

お願いだから、と心で繰り返していると、先生はため息をついて分かったとこぼし、部屋を後にする。

一人になった病室で、葉の挟まれた文庫本に手を伸ばすと扉が開く音が聞こえて、そちらに振り向く。

そこには昨日正論を体で振りかざしていた、あの男がいた。

「やあ」

好青年のようないけないけ好かない挨拶をする彼に、私は身構える。

「何しに来たの？ 説教？」

「酷いなあ、遊びに来たんだよ」

「あそびに……？」

聞きなれないフレーズを何度も反芻していると、彼は私に手に取っている本を見てわあっと感嘆の声をあげた。

「ねえそれ種崎先生の新しい作品じゃない!?」

「えっ、ええ」

「うわあ僕大好きなんだ、種崎先生。この間小説がドラマ化もしたし、本当に今注目の小説家さんって感じだよね!」

驚いた。種崎先生は最近ドラマ化した先生とはいえ、そこまで有名ではない。私は大賞を受賞された際から応援しているので、正直ファンに出会ったのは初めてだった。

「えっ、渚のビロードは読んだ?」

「読んだ! 主人公の綾瀬がサーフィンをするんだよねー、僕あの波の描写が好きなんだ」

「じゃあ、しらすぎが僕を呼んでいる」

「僕それ大好き! この間ドラマ化したのはそれだよね! 終始せつなくて、胸が詰まりそうな勢いだったよ」

「セックス恐怖症の彼女は!」

「ニッチな所来るね! 主人公のヤスナが印象的だったなあ。名前合ってる?」

「あんなだよ。でも安に那だから間違えやすいよね」

話を展開させていると、彼は意気揚々とした後にハツとして肩をすぼめる。

「ご、ごめん、僕普通に喋りたかっただけなのに」

真っ赤になって俯く彼が新鮮で、私は顔を覗き込んでへらへら笑う。

「へえ、あなたにも弱点ってあるのね。我を忘れる所あり」

「メ、メモしないでよ！」

「ふふっ、なあにその顔！ まっかつか、あははは！」

彼のリングゴみたいな顔が面白くておなかを抱えて笑っていると、彼はにこにこいつもの微笑みに戻っていた。

「はあ、ひい……なに、どうしたの？」

「ううん。里美ちゃん、すごくかわいい顔で笑うなあって」

「かつ」

思わず声が裏返ってしまった私とは反対に、彼の表情は変わらなかった。

「僕やっぱり里美ちゃんが好きだなあ」

のほほんとした声で発せられた言葉は、私の思考をショートさせる。

「すぎだ、なんて、そんな」

「ふふ、じゃあ僕は行くね」

「え、もう？」

「うん。病室の外に人もいるし」

彼はじゃあねと手を振り、颯爽と病室の外へ駆け出しに行った。

「あっ、ちょっと、ま」



「きとちゃん！」

勢いよく開かれた扉の前には、実に恰幅のいい小柄な老婆が一人。

「あんた余命どうか言われたべ、いつまでなん！ ばあちゃんに何でもいっとくれ！」

勢いよく肩に掴みかかって来たのは、遠方に住むはずの祖母だった。電車を乗り継いで单身ここまで来たのか、大きな荷物入れの頭巾が床に散乱している。

「おばあちゃん!？」

「んまああんた顔が赤いべよ！ 熱あるんけ!？」

「わかった、わかったよおばあちゃん！」

耳を塞ぎながら病室の外を見ると、そこにもう彼の姿はなかった。

四月二十四日

私と颯君は、週に三回は必ず会って話していた。

彼の病室に行きたいとも言ったがどうせなら外に行こうよと誘われ、私たちはいつも中庭で、雨天時は椅子とテーブルがある談話室で、とにかく色んな話をしてきた。どこの国に行きたいか、

最初こそ泣かされたものの、彼はそれ以来あまり生きようよとかいうことはなくなつた。それどころか私の余命にも触れることなく、あくまでも友達として、もとい好きな子に接するような感じで会話を楽しんでいた。

そして今日もいつもの中庭で談笑しながら、花を眺めていた時だった。

「ねえ、里美ちゃんは何の花が一番好き？」

一番好きな花？ と彼に聞くとうんうんと頷くので、私は首をかしげて考えた。

好きな花自体は沢山ある。花桃、菖蒲、蘭。でも一番といわれると、少し前にドラマで見た、真っ黄色が眩しくてヒロインがその中で踊っている、あの背の高い植物しか思い浮かべられなかった。

「ひまわり……」

零した言葉は、彼の耳に届いていた。

「僕もひまわりが一番好きなんだ」

「そうなの？」

私が聞き返すと、彼はゆっくり首を縦に振った。

「元気だった時、夏場はよくひまわり畑に行ってたんだ。祖母が好きで。僕もついて行って、兄弟たちとひまわり畑でかけっこした。あつ、僕四人兄弟の三番目なんだ」

「四人兄弟？」

「まあ置いといて。ある日祖母に、あんたが一番ひまわりを楽しそうに見るからってひまわりのプリ

ザーブドフラワーをもらったんだ。まんまる手のりサイズで、割れちゃいそうなガラスの中に永遠に枯れないひまわりが閉じ込められてる。僕の宝物なんだ」

幸せそうに笑う彼の顔はいつまでも見ていられるような、それこそひまわりのような優しい笑顔だった。

「わたし、颯君が好き」

「へ」

素っ頓狂な彼とは裏腹に、私は切羽詰まったように言葉を連ねる。

「わからない。友達としてかもしれない。でも、あなたと一緒にひまわりを見に行きたいって思ったの。夏じゃなくても、秋でも冬でも、もみじも雪も、全部全部一緒に見たいって」

「里美ちゃん……」

「ね、元気になったら一緒に沢山の場所に行こう？ 桜もひまわりも紅葉も冬の雪景色も、全部一緒に見るの。」

思わず彼の手を取った。ひんやりとしている彼の手とは打って変わって、私の手は燃えるように熱かった。

「死ぬ気満々だった里美ちゃんだとは思えないな」

背後から聞こえた声に振り返ると、困ったような顔をして私の主治医が立っていた。

「あっ、加藤先生！」

「話したいことがあるんだ。彼女借りてくよ？ 坂本君」

「はい、煮るなり焼くなり」

「えっ、私食べられるの!？」

「はは、良いニュースだから。病室に行こう」

歩き出す先生の後をひな鳥のように追いかけて、はたと振り向いて手を勢い良く振った。

「またね、颯君！」

はつきりそう告げると、彼はにこやかに手を振ってくれた。

五月十三日

あの良いニュースとは、私の病状が回復しているということだった。

「今の里美ちゃんは生命力にあふれているよ。半年は余裕で生きられる。でも無理はしないように」

そう頭をなでられた時は本当に嬉しかった。先週のゴールデンウィークなんかは一時帰宅が許されて田舎の新緑に溢れた祖母の家で両親と思いつきり羽を伸ばした。その間一回も発作が出なかつ

たことから、退院したら祖母の家で畑とかを手伝いながら暮らすという話も出始めていた。

とにかく生きられるというのが幸せで、体力育成も頑張った。今までだったら塞ぎこんでひとりベッドに座っていたけれど、看護師さんとバドミントンをしたり花の水やりをするようになってからは、生きるのが楽しい。

あの時の私に、心が折れたら終わりだということを教えてあげたいぐらいだった。でも対照的に、颯君と過ごす時間は減っていった。待ち時間に彼が来なくて病室に行こうとしたら運動の時間をずらしたいと言われ、渋々そっちに行ったりもした。

先生に颯君に送ってほしいと言い手紙を渡したものの、返事もない。ちゃんと届いているのかどうかもわからない。

颯君の主治医の先生に話しかけようと思ったが、忙しそうにしているのを見てはばかりされた。

「どうしたんだろう、颯君」

「だれがどうしたって？」

久しぶりに聞いた声はどこか澄んでいて、それでいてやっぱり優しくかった。

「颯君！」

少し伸びた髪を頭をふるって軽く整えた彼は、やあと行って笑った。

「ごめん、最近会えなかったよね」

「全然。なにかあったの？」

「いや？　なんともないよ。大丈夫」

「うそ。顔がなんか白いわよ。それにほら、手もつつめたい。どうしたの？」

私が顔を覗き込むと、彼はうつむいて何とも言えない表情をしていた。

「あれ、颯君？」

「……は」

「は？」

「実は、一時退院しました！」

あっけらかんと話す彼のテンションについていけず、私はぼかんと口を開く。

「実家っていいね、映画とか沢山見たんだけど」

颯君が帰省話を始めた所で、廊下のほうが騒がしくなっていく。

「まずいな」

「えっ」

舌打ちを漏らす颯君に困惑していると、彼は私の手を握り返して謝罪する。

「ごめん、戻るね。じゃ」

ばいばいと半ば強引に帰っていく彼の背に、私は手を伸ばした。

「あっ、待って！」

「次はゆっくり話すから！　だから、待っててね」

手を振って病室へと戻っていく颯君に、私は戸惑いを隠せなかった。

「いまの、颯君の主治医の……」

「里美ちゃん！」

切羽詰まっているような声が背後から聞こえて、私は振り向く。

「加藤先生！ どうしたの？」

「いやあ、坂本君知らない？ ふらってどこか行っちゃって」

「あっ、さっき自分の病室に戻ったけど、彼の容体って、どうなの？」

祈るような気持ちでそう聞くと、少し間を置いた後に何言ってるのさと笑われた。

「違うよ里美ちゃん。彼はちょっと複雑な病気だから、脱走しちゃったらどうしようってみんな慌てただけ。ただの検診の時間さ」

「検診」

「そう。僕も里美ちゃんが脱走したら困るし。ほら、昔はよく試みてたじゃないか」

「そ、それは小さい頃の話！」

「はは、ごめんって」

私は加藤先生と談笑しながら、自室に戻った。

その日の晩、颯君が亡くなったことも知らないで。

五月十五日

颯君の主治医の先生が呆然とする私の病室に顔を出したのは、二日後のことだった。

「里美ちゃん」

ぼんやりとした頭の中に主治医の声が聞こえてきて、私は適当に返事をする。

「ああ、うん」

「覇気がないね、聞いたよ。坂本君が亡くなってから容態が悪いんだって？」

「やめて、彼は死んでない」

「まあまあ。ほら、これを預かってんだ」

主治医が取り出したのは、何の変哲もない紙袋と手紙だった。

「先に手紙を読んでくれ。本人からの要望だ」

私は言われたままに紙袋の中は見ず、手紙の封を開いた。

そこにはやけにきれいで、本当に穏やかな性格が伝わってくるような文字が綴られていた。

さとみちゃんへ



颯です。返事、遅くなってごめんなさい。  
それと、謝らなくちゃいけないです。

僕は、もうあと数日で死んでしまいます。

今は五月十日、僕は一か月前に余命一か月と言われました。

僕はこの病院に来る前、ここよりもっと小さくて、もっと劣悪な環境の病院にいました。

親は四人兄弟の三番目の僕にお金を出してくれることもなく、初めて僕の病室を訪れた祖父が大金をはたいてこの環境のいい病院に移してくれたんだ。

でもろくな治療を受けていなかったから、僕は余命一か月しかなかったんだ。

そんな時に、君に出会った。

僕はどうせ死ぬなら楽しくいようと思った。君はどうせ死ぬんだからと悲観していたよね。

あの時、傷つけるようなことを言っただごめんなさい。

君を見たときに迷わず好きだと思った。君の下を向く瞳が、サラサラのロングヘアが、華奢な体が、全てが、綺麗だと思ったんだ。

泣かせちゃった日の翌日、僕は君の部屋で三十分くらいうろろしてたんだよ。

あとは、種崎先生のファンだって知れてうれしかった。

君が景色と一緒に見ようって言ってくれたから、僕はパンフレットをいっぱい見るようになった

んだ。

全部全部、さとみちゃんのおかげなんだよ。

本当にありがとう。

僕はこれからいなくなってしまうけど、君が僕を覚えていてくれれば僕は死なないんだ。

君は、僕を忘れないでいてくれるかな？

余命三か月の君へ

坂本颯

手紙を読み終えたとき、私はぼろぼろと涙を流していた。

颯君は確かに私に宛てて手紙を書いてくれていて、いつ渡そうか悩んでいたのだろう。まさかあんなにすぐに自分が突然死してしまうとは思わなかったのだろう。

そうじゃないと、最期にまた話そうなんて言わない。

私は主治医の先生の前だということも忘れて、声を上げて泣いていた。

「おきまった？」

主治医の先生に背中をさすられ、私は鼻をすすりながら頷く。

「うん、ぼちぼち」

「そうか、よかった」

「颯君、何か言ってた？ 私のこと」

「ごしごし目を拭いて尋ねると、うーんと唸ったあとににこにここと話し出した。

「無理して会いに行くぐらいだからな。里美ちゃんのが本当に大好きで、僕が一ヶ月で死んだらこの手紙を渡してくれ、一ヶ月で死なずに退院できたらこの手紙を捨てるって言ってたな」

なんでも退院したら手紙返せなくってごめんねと謝って、またその時書いた手紙を渡そうとしていたらしい。

でも私はある一言が気になって、眉間にシワを寄せながら聞き返した。

「無理して……？ でも彼、一時退院したって」

ゴールドデンウィークに一時退院したと言っていたというと、主治医は困った顔をして俯く。

「実は……彼、ちょうどゴールドデンウィークに心肺停止になったんだ」

ゴールドデンウィークって、私が田舎にいたときじゃないか。

私が田舎で羽を伸ばしている間、彼は生死の境をさまよっていたのだ。

「聞いて、ない」

「言いたくなかったんだろうな。意識を戻した後、この事は里美ちゃんに絶対に言わないでと言われたよ」

「そんな、な」

私はなぜ、気付かなかったのだろう。

彼の自然すぎる、不自然な演技に。

彼のいつも以上に冷たい体温に、なぜ気づけなかったのだろう。

「里美ちゃん、二日前、坂本君が中庭に来ただろう？」

「え？ うん」

「坂本君はあの日、自ら点滴の管と呼吸チューブを無理やり外して、会いに行ったんだ」

「えっ」

「それがトリガーになったのかはわからない。僕らが脱走した坂本君を彼の部屋で見つけたときは、ベッドの前で力なく倒れていたんだ」

主治医の先生の空虚な微笑みが、なんだか虚しさを深めさせた。

「それほどまでに里美ちゃん、君に心配をかけたくなかったんだろう。君に、ただの自分を愛してほしかったんだね」

「そんな、私は点滴がついていても」

「彼は心配されることを嫌っていたからね。僕にも心配しないでくださいって睨んできたよ」

くつくつと笑う主治医に、私は俯いて黙るしかなかった。

「じゃあ、私はこれで」

「ま、まって」

「気に病むなよ里美ちゃん。紙袋も忘れんな」

主治医の言葉に、紙袋に視線を戻す。

おずおずと袋を受け取り紙袋を軽く揺ると、中で何かがころりと転がった。

私は手を突っ込んで、袋の中をまさぐった。まんまるで、触れたらひんやりしている、彼の手の温度に似たガラスの何か。

「これ」

私を取り出したのは、彼の宝物のはずだったひまわりのプリザーブドフラワーだった。

彼はきつとこれを私に託したかったのだろう。自分の形見として、いつまでも持っていて欲しいのだろう。

私は目を閉じて、彼の言葉、表情、仕草を思い出す。

困ったように笑う笑顔、やあというイケメン風の挨拶。長めの髪から覗く綺麗な瞳。

「颯君」

そしてなによりも、生きてほしいという思いがこもった目線。

鼻水がたれ落ちるのがいやで、私は天井を見据えた。

「私、生きるよ」

大粒の涙は、今日限りでお終いだ。

そう決意して、私は笑顔で涙を流し続けた。

あれから夏が来て私は退院し、祖母の家で縁に囲まれ過ごしていた。

トマトの収穫をしたり、柴犬の散歩をしたり、祖母と共に朝一に行ったり。そんなのかな毎日、発作という動作は無くなっていた。

私は退院するにあたって、祖母に一つあるわがまを言った。

私の言葉に熱意を感じたのか、祖母は良いことだと頷いて、その花を育てるのを手伝ってくれた。

私は縁側で座りながら、立派に太陽に向かって咲いている黄色い天使を見つめて、きゅっと左手を胸の前で握りこむ。

颯君のおかげで、私は生きる希望を取り戻せた。

彼への想いや彼の記憶は、私が生きている限り永久に消えることはない。

私が死なない限り、ずっと。

「きとちゃんスイカ切れたべよ、食いなー」

調理場から祖母の声が聞こえてきて、私はくるりと振り向き笑う。

「今行く！」

駆けていく私の手には、あの日のプリザーブドフラワーが、いつまでも咲き誇っていた。



鉛色の世界で、  
ふたり



喧騒を孕むカフェで飲む、鼻孔を刺激するコーヒーの匂い。

「昨日、親がぎっくり腰になったの」

二人掛けソファを独占して話す。コーヒーとともに注文した Milfie ユにフォークをさくりと突き立て口に含む。

しゃおっと独特のパイ生地が、私の口の中を刺激する。この閑静なテーブルとは逆に、ふたつ隣のテーブルに座るカップルは、華やかな笑顔を顔に張り付けて話していた。花が舞うようなオーラが明るくて眩しい。

向こうのほうに座るお年寄りの夫婦は、おばあさんがやさしく話しかけ、おじいさんが競馬新聞を広げながら時折うなずく。阿吽の呼吸、熟年夫婦といったところだ。穏やかな空気がその場の時間をゆつたりとしたものに変えている。

私の目の前に座る島崎しまざき太陽は、アイスココアをストローで吸い上げながら、何の話も聞かずに真下の携帯パズルゲームに夢中だった。

「来月で付き合って五年目になるね」

私はそう彼に語り掛ける。彼はゲームの周回に忙しいのだろう。私の心の周回はしてくれない。

私は鼻の先でため息をつき、コーヒーにミルクを足してスプーンで輪を描く。何か薬より良いものが私たちに流れているとすれば、お互いに将来が確約された人間で、そこにあるのは愛よりも空気。一緒にいても空気のような存在だ。何もしなくても、彼は離れていかない。何かしても、彼は何も

変わらない。

繰り返したため息についても、彼はこちらを見もしない。なんだか悔しくなって、一思いにミルフィーユを口にほおぼった。

「次、どこ行くの」

そう聞くと、彼はようやく顔を上げてほそっと話す。

「どうでも」

私はこの男のどこでもという言葉が、ひどく嫌いだった。

○

もう桜も落ちて木には若葉が生い茂り始めた、新緑の五月中旬。

電車の横掛けの席に座っていたときに、ふとカバンの中からのぞかせた大学の学生証の、不愛想な顔をしたボブヘアの自分を見つめる。

その隣には、国際英語学科 かみきはるか 神木遥の文字。あとは学生番号と、記載された一月十七日生まれるという己の誕生日。

四月のオリエンテーションで配られた新しい学生証は、やっぱり年々愛想の悪そうな顔になっていく。それもそうだ。この写真は、あの喫茶店でのもの悲しいデートの次の日に撮った写真なのだから。

私は学生証にかぶせるようにスマホを置き、画面を見る。すると、新しいメールが入っていた。私は送り主を確認して、奥歯をきゅっとかみしめる。

この間は会いに来てくれてありがとうね！ 太陽、不器用なところがあるけれど仲良くしてあげてね。って、もう五年も付き合ったらば重々承知か！ 若いっていいわね、また会いに来てね！

恵子

恵子さんは、太陽の母親だ。

私たちは、互いの親公認で非常に清い交際をしている。彼はスポーツカーを持っていて、休日はずっとたまに遠くに連れて行ってくれる。お父さんが始めた会社が最近軌道に乗ってきて、今話題のベンチャー企業の社長の息子として有名だ。もちろん業界では結構名が知れている。収入だっていいし、実はスカウトされて来年から働くことにもなっている。ルックスも自分の好みに八割ぐらい当てはまっている。

これが私の、別れられない材料。

将来を確約された関係は、特に面倒で、時に複雑だ。

失恋もしていないのにラブソングを聞きながら、私はうとうととまどろんで、電車で揺られなが

ら眠りについた。

○

付き合ったのは、向こうからの告白がきっかけだ。

高校二年生の時。私と同じクラスだった元カレがちよっと面倒なタイプの男で、執着むき出し独占欲まみれの男だったのが話すきっかけ。

まだその男と付き合っていたときに、帰る方向がたまたま一緒だった彼に話しかけられたのだ。

「神木さん、辛そう」

私はその時、どんな顔をしていたかわからない。帰っている途中で、疲れていたのかもしれない。

今着たらきついであろうブレザーとスカートとタイツ。腰まで伸ばしていた黒髪を振り向くと同時に揺らして、私はほくそ笑んだ。

「だから？」

その時だって、携帯にはメッセージアプリの通知音がうるさかった。もういっぱいいっぱいだったんだろう。その言葉を吐き捨てると同時に、ぼろっと涙をこぼしてしまったのだ。

それを見たと同時に太陽が走って抱きしめてきて、その公園まで歩こうと提案してきた。抱き合ったと同時に通知音はしつこくなくて、私は恐怖と温もりというシロクマもびっくりの寒暖差に

めまいがしたものだ。

公園についたと同時に、彼に話を聞いてもらって、意見を交換する。彼はそんなのすぐ別れたほうが良いと他の人間と似たような言葉を発してきた。

「そんなことわかってるよ」

私が静かにつぶやいて携帯を取り出すと、彼は勢いよく私の携帯を奪ってきて、私のストーカーに電話をかけた。

そいつはすぐに出て、今どこにいるんだ、俺は知っているんだとよくわからない御託を並べてくる。そんなのを一蹴するように、彼は電話越しの男に向かって吐き捨ててくれたのだ。

「こいつは、今日から俺と付き合うんだ」

一瞬時が止まったかのようなスローモーション。何を言っているのか全く分からなかった。彼が話しているのが、自分と同じ日本語であるのかすら、よくわからなくなっていた。

電話越しのストーカーが金切り声で怒鳴る中、彼は勢いよく電話を切り、きまりが悪そうに私のほうを見ては目をそらした。

「嫌だったら、ごめん」

好き、という言葉は、この時はまだ言われていなかった。

○

電車の中で盛大に眠りこけてしまい、ふらふらとした頭を押さえながら大学につく。

「遙、おはよう！」

教室に入っすぐ話しかけてくれたのは、同じ大学四年でありゼミも一緒の松島瑠奈まつしまるなだった。

「おはよ。春だけど朝は冷えるね、菜々子は？」

「菜々子は就活。地元就職だから、今からが本番みたい」

なるほど就活か、と頷く。話の話題に上がった山田菜々子やまだななこは、ゼミは違うけれどいつも瑠奈と三人で行動している友人だ。ほやほやと抜けているところがあるが、イベントごとになると張り切るタイプの切り替えのうまい女の子。

その他大勢話しかけてくれる子たちはいるけれど、最近はこの三人でいつもお昼ご飯を食べたりしている。

「瑠奈は就活大丈夫なの？」

首をかしげながら問いかけると、にまっと順調そうな笑顔を浮かべてくる。

「それがね？ なかなかの好待遇の会社を見つけて、猛プッシュしてみたら面接まで取り付けてくれて！ そのうち面接に行ってきますす！」

満点の笑顔とともに警察のような華麗な敬礼をしてきた彼女に、私はふふふと笑ってやる。

「遙は？ って、聞くこともないか」

「いや、うん、まあ」

自分でも思う、なんとも歯切れの悪い返事。なんであって、私は太陽のお父さんが働いている会社にスカウトされてもうすでに内定を得ているからである。

これもやっぱり、別れられない材料。

「いいなあいいなあ、将来有望車持ちな彼氏もいて、両親の許可だつてとつてあつて、お互いに兄弟がいないから兄嫁問題とかそういうものもない。最高じゃん」

瑠奈が隣で頬杖をつきながら、うらやましいですなと社長さんのような話し方をする。

私の両親、特に父はかなり放牧主義な人で、私がやることなすことは特に止めない。推進もしたいため、いいんじゃない？ と言われて終わりだ。

別に親子関係が悪いわけではない。母親は長年の夢だったパン屋さんで朝早くからパンを作り、父親は大好きな車関係の仕事をしている。両親ともに好きなことをしているため、自由な家族だとよく言われる。

だから太陽のお父さんの会社に就職すると言ったときも、いいじゃんと言われて終わりだった。

「まあまあ、ほらもう授業始まるよ、課題はやってきたの？」

「見せてください、遥様！」

いつものようにはーっと頭を垂れてきた瑠奈に、私はいはいと軽くあしらいながらノートを見せるのだった。

梅雨も近づきじんめりとしてきた六月、私はいつものように学校にたどり着いた。自動ドアを抜けたところで、スマートフォン時刻を確認する。

大学を出て電車に乗って帰る時間までは、まだ三十分ほど時間がある。

「あれ？ 瑠奈、シパリ？」

スツスツと人差し指と中指を立て左右に動かす彼女に、私はそうだよとポーチを出す。

「いいねえ、私親にやめとけって言われちゃってさー、禁煙なう」

「あらあら、そいつは残念。いつでも戻ってきなさんな」

悪代官のように笑って見せると、なんか誘われたんだけどとニヤニヤされる。

帰るための自動ドアを手を振りながら通り抜ける瑠奈を見送り、私はその左側にある小さな扉を開き、吸い寄せられるようにとある場所に向かう。

「たばこ、たばこ」

先ほど瑠奈に見せたポーチから電子タバコを取り出し、今日も喫煙にいそしむ。

ここは、学校の小さな屋外喫煙所。

彼氏に対して八方美人で接してしまう私にとって、この喫煙所は私の腐った部分の掃きだめだっ



た。

「おいしい」

誰に言うでもない感想を吐きながら、ぷはあと大口を開けて煙を吐き出す。二十歳の誕生日の時から約二年間もタバコを吸っているため、罪悪感などはとうの昔に消え失せていた。

一人で惜しげもなく喫煙に興じていると、ふらりと現れた長身のイケメンに私の視線は釘付けになった。

毛先だけ染めたのであろう、髪の手先が青くなつた清潔感漂うマッシュヘア。肌の手入れには気を付けているのであろうと感じさせるもちもちとした頬、一重にしては大きい目。

私の身長なんか二十センチぐらい優に越してしまいそうなその男は、あろうことか私の隣に立つて、箱から一本の紙たばこを取り出す。

神から与えられたかのように整った横顔が煙草をくわえ、ジッポライターがピーン、とつま弾くように軽やかな音を立てる。すうっ、と勢いよく吸った後に、一呼吸おき青空に向けて彼は煙を吐き出す。まるで何かの絵のモデルと言わんばかりの、ドラマのワンシーンのような美しすぎる光景に、私の電子タバコは吸われることなくゆらゆらと煙を立てていた。

ふと男の人がこつちを向いて、私はあわてて視線をそらそうとする。が、正面から見据えた彼のブラウンアイが私をとらえて離さなかった。

「見すぎ」

ふはっと吹きだすように笑われてしまつて、私は思わず顔を背ける。露骨に目を右往左往に泳がせてしまい、その仕草にまた大きな声で笑われてしまうのだった。

「面白いなあ、神木さんは」

樂しそうな男の人に、私はふと自分の名字を呼ばれたことに疑問を持ち眉間にしわを寄せる。

「な、なんで私の名前、知つて」

「やだなあ、同じゼミだよ？ 青井樹あおいつき、知らない？」

同じゼミ、という言葉に頭がカナヅチで撃たれたかのようにショートしてしまう。周りを見ていないにもほどがある自分の把握力のなさに、心の中で反省した。

「なんにせよ、神木さんがタバコ吸つてるのは知らなかったな」

「べ、別にいいでしょ」

「うん、とがめてはない」

にやつと歯を見せて笑う彼の笑顔は、太陽のようにまぶしい。

「俺は一か月前から吸い始めたばっかなんだよね、だから知らないのもとーぜん」

私たちの間にあつた屋外用の灰皿に、彼は小さくなつた煙草を人差し指でツンと奥に押し込む。

「じゃあね」

「え、もう？」

「学校で吸うのは一本だけって決めてるんだ」

ドヤ顔でそう言う彼に、私はそうなんだとしよぼしよぼした声で相槌を打つ。三回は吸いたい私の心は、またも反省会を開くのがあった。

「じゃ、また明日」

手のひらをこつちにぱつと見せて扉を開けて出ていく彼を、私は空いた片手をゆらゆらと揺らしながら見送った。

あんなにきれいな人が同じ年だとは思えなかった。一か月前から吸っているようには見えない、もっと長いこと吸っていきそうな美しい吸い方を、私はポーっと頭の中で思い出していた。

そういえば彼、去り際にまた明日と言っていたな。

「そ、そうか、同じゼミじゃんか……」

力なくこぼしたと息とともに、私はよぼよぼとアスファルトの床にしゃがみこんでしまうのだった。

○

ストーカー男と半ば強引に別れられて、好きという言葉と感情が追い付いてないまま太陽と付き合うことになった翌日。

「なあ、遥、あれいっただいどういことなんだよ、なあ、なあ！」

元カレが良い気にならないのはわかっていて。周りの友達だと思っていた女も、離れていった。殴られ蹴られ新しい男を作った女としてレットルを貼られ陰口も増えた。

私が孤立していく中で、太陽はそっとそばに付き添ってくれた。

「俺は彼氏だし！」

ふふんと誇らしげにそういう彼がなんだかおかしくて、私は思わず吹き出してしまったことを今でも鮮明に覚えている。

元彼は私の悪口を目の前で言うようになった。早く目の前の奴ら別れないかな、と大きな声で言われ、やめろってとくすくす笑う取り巻きの男共の声が気持ち悪かった。彼が大丈夫だよと慰めてくれたり、元彼にけんかを売ったりして助けてくれた。

でも私は、結局は弱者の遠吠えで、別れられたことに対してすっきりしていたので、正直言って鬱陶しいとも何とも思っていなかった。

そうこうして、元カレがうんともすんとも私になびかないことにあきらめかけていたとき。太陽が、デートに行こうと誘ってきたのだった。

「初デート、になるな。どこ行きたい？」

一緒に帰っているとき、もじもじと男子高校生らしく照れる彼に、うーんと首をかしげながら考えたのちに、私は駅前に新しくリニューアルオープンした喫茶店を案に挙げてみた。

「最近新しくなって、ミルフィーユがおいしい店でね、行きたいなあって」

ついつい明るくなってしまったテンションでさういうと、はしゃぐ私につられるように彼もはしゃぎながら話してくる。

「いいな！　そこにしよう！」

この時はまだ、行き先も交通手段も、基本的には彼が考えてくれていた。

○

「今日もいた」

にんまりと口角をあげてくる男は、先客の私の隣に吸い寄せられるように寄ってくる。

あれからもう一か月くらい月日はたって、私たちは講義の前などの合間の時間に時々話すようになった。喫煙所で会うのは、二週間に一回あるかないか。だから今日ここで会うのは三回目だ。校内では何回も顔を合わせているのに。

「それ、おいしい？」

指をさされた電子タバコに、私は口にもうとした手を止めて説明する。

「んー、コスパはいいかな。でも紙のほうが煙を吸ってる感じはする」

紙のたばこだといろいろとお金がかかるが、電子タバコだとやっぱり幾分かお得だ。私は見せつけるように一口吸ってみせる。

「つてかき、松島さんと話してるの聞いちゃったんだけど、神木さんって彼氏いるんだね」

一番知られたくないことを知られていて、私はゲホゲホと思わずむせる。大丈夫かと心配されるものの、何でもないと言いながら呼吸を整えた。

「付き合ってた何か月？」

「ぞ、五年」

まだ息も切れ切れで、バクバクとした心臓のままに答えると、三か月とか答えてくると思ったの  
だろう、彼は予想外の回答に驚嘆する。

「うっわ長い！　じゃあもう結婚とか考えてる感じ？」

「どうだろう、彼はそんな素振り見せないけどね」

いくらか落ち着いてきた感情にほっとしていると、彼は目を細めながらうらやましそうな表情を  
する。

「いいな、うまくいってそうで」

うまくいっている？

どこが。私たちのどこがうまくいっているのだろうか。

情や情けなど何一つとして残っていない私たちの、どこをうまくいっていると評価したの  
だろうか。

何もうまくいっていないと反論しようとすると、彼が重い口を開く。

「俺も彼女いるんだよ。でもうまくいってない」

私は再びショックを受け、一瞬頭の中の時が止まる。

彼に、彼女がいた。

そりゃあそうだろう。彼はかっこいいし、大人だし、落ち着いていて、まさに理想の男性像と言わんばかりの人間だ。

「そっちは何年？」

動揺で震える声を隠しながら、私は彼に問う。

「三年」

「ああ、マンネリが一番押し寄せるときだ」

呼吸を整え、いたずらっぽく笑ってやる私とは対照的に、そうなんだよなあと彼はさみしそうに笑った。

「俺から告白したんじゃないんだ、彼女が高校の頃の後輩で、俺が卒業して一年後くらいに紆余曲折あって告白された」

「向こうから？ 珍しい」

「でもその割にはそんなに話しかけてこないし、全然俺より先に働いてて、いま社会人三年目。」

だから、俺よりも仕事か恋人って感じがするんだよなと彼はもう一口たばこをくわえた。

「カエル化現象ってやつ、かもよ。その彼女さん」

「かなあ、でも振る理由もないし」

このままでいいと思つてシム自分の気持ちとのせめぎあい、なんだろう。私には、その気持ちが痛いほどに分かった。

「私も一緒」

「え？」

彼が拍子抜けしたような声を出す、あえて彼の顔は見ずに私は顔色一つ変えずに話し出す。

「彼は私を居心地のいい空気だと思つて、所詮お飾りなんだと思う。告白してきたのも向こうで、振ろうと思えばいくらでも振れる」

一息に愚痴つてしまえば、勢いは止まらない。いつもよりも饒舌に、私は言葉を打なげる。

「でも向こうは父親の会社の次期社長、私はその会社に内定が決まつてる、高い車持ち、お金も持つてる」

肩を落としたばこをくわえ、ふうつとため息とともに煙を吐き出す。

「結局、私も向こうもお互いを知りすぎてる。だから興味が湧かないの」

電子タバコをポーチにしまって腕を組みうつむくと、彼も灰皿に小さくなったたばこをぽんと落とす。

「そうだったんだ、うまくいってると思いこんじゃって、ごめん」

気を使ってくれる彼のやさしさが荒んだ心に沁みる。私はふるふるとゆるく首を振った。



そのあとお互いに沈黙の中うつむいていると、彼はよしと何かを意気込んだような声を上げる。

「つらいことがあったら、お互いに相談しあおう。ここで」

そう言って正面に向き合い、ぎゅっと躊躇なく彼に両手を握られる。

「うええ、ちょっ」

変な声を出しつわつわたたと慌てるも、彼はふふつと笑うだけだった。

「それじゃ。お互い頑張ろう」

手をふんわりと放して、喫煙所から出ていく彼を、私は手を口に当てながらぼかんと眺めていた。手の暖かさは、その日眠るまで冷めてはくれなかった。

翌日、同級生の男の子から神木さんのアカウント教えてって言われたから、という言葉添えて青木君の連絡先が届いていたことを知り、朝起きたとたん知って目玉が飛び出るほどに驚くのは、また別の話。

○

ざあざあど雨が降りしきる日のことだった。

その日は瑠奈も菜々子も就活で、私は一人で行動していた。お昼ご飯を一人で食べ、面接がキツイという菜々子の泣き言メッセージに頑張んなさいと母親のようなメッセージを送って、いつもの

ように午後からの抗議に参加していた時。

「では、この問題を……ん？」

先生が、眼鏡の上にあげて、とある生徒のほうを注視する。

「おーい青井！ 大丈夫か？」

見ると、青井君が机に突っ伏している。腕はテーブルの下に力なくだるんと垂れ下がって、まるでうなだれているようだ。

「だいじょうぶ、で、す」

「いやどっからどう見ても大丈夫とは言い切れんが。ああ、神木！」

「はい？」

様子のおかしい青井君を指さし、先生はニカッと歯を出して笑う。

「お前、保健室に青井を連れて行ってくれ」

「はい!？」

意味が分からなくて聞き返すと、今日は六月の三十日ですと朗らかに返される。

「出席番号が神木の生徒番号と一緒だったからな」

「そういう選び方します？」

うだうだ言っても仕方がない。体調の悪い人がいるのだから、目の前にいる人間を運ぶことに集中しよう。

「青井君、立てる？」

ぼやっとした顔で苦しそうにこっちを見つめてきた青井君の顔は、真っ赤でゆでだこのようだった。これは保健室に行つて少し休んでから、早退したほうがいい。

肩貸してと言つて半ば引きずるように講義室をあとにして、保健室へと急ぐ。その間にも、彼の熱で愁いを帯びた吐息が耳を軽やかに刺激してきて、私は謎に逸る気持ちを抑えて生唾を飲んだ。

保健室について、ガラガラと音を立てて扉を開けると案の定誰もいず、ザーッと砂嵐のような音がからっぽの室内に響いていた。

ラブロマンスとかだとここでイチャイチャするのが定番だが、お互いに恋人持ちであれば男側は高熱にうなされていなのだ。そんなちやちなこと抜かしている場合ではない。

「先生いないね、ちょっと呼んでくる」

入って左にあるベッドに彼を寝かせて、誰でもいいから人を呼ぼうとしたとき、彼は私が羽織っていたパーカーの袖をぐつと引つ張った。

「ん」

子供のように不満げな顔をする彼に、私はどうしていいかわからず何度も首を両サイドにかしげ

る。  
「え、どう、し」

すると、むくりと起き上がった彼が私の後頭部に手を回し、本来私の咀嚼するための器官に自身

の同じものを押し当ててくる。

少女漫画のような展開に呆気にとられていると、彼は手を放してふにゃふにゃと笑う。

「まぢっ」

違う。

私は違う。

私じゃない。彼に見えているのは私じゃない。

その人物が彼の恋人だと察知し、私は何事もなく離れようとする。

「おいてくの？ おれはどうすればいい？」

部屋を出ようとしたときに投げかけられた呂律が回っていない子供のような言葉に、普段彼が彼女に対してどのように扱われているかも、否が応でもひしひしと伝わってくる。

「わたしは、はるかだよ、ばか」

大きな音を立てて扉を閉め、私は固く閉ざしたドアの前にへたり込んでしまった。

ぐずぐずと目から余計なものがこぼれてきて、どうしようもなく不毛で小さすぎる片思いは、くすぶることしか知らなかった。

○

初デートで行った喫茶店のミルクティーはおいしくて、コーヒーによく合った。

駅前だということから、これからもたまにここに来ようと太陽と約束をした。

一か月が過ぎて二か月が過ぎて、私たちはなんだかんだで周囲の子たちにお似合いだね、熟年夫婦といわれるくらいに落ち着いた関係になった。

「熟年夫婦って、まだ早いなあ」

そう優しく微笑む彼はとても柔和な笑みを浮かべていて、私もつられるように笑ったものだ。

次のデートはどこがいい？ と彼に聞くと、遥と一緒にならどこでもいいよと微笑まれた。私と一緒にということに意味があるんだと舞い上がった私は、動物園や水族館などいろいろ提案して、いろんなところを回った。

中でも一番楽しかったのは、動物園での爬虫類館でのやりとり。

爬虫類ということもあって少し漂う独特なおい、蛇やカエルという女の子や子供たちは怖がって入ろうとしないそこは、とても静かで落ち着いた雰囲気だった。

においを除けば動物園とは思えない、いってしまえば図書館のような雰囲気が醸し出される場所で、私たちはいろんないきものを見た。

「あつ、ミズオオトカゲ！」

太陽が子供のようにたたつと駆け寄り、うっとりとしたような顔でガラスに張り付く。私も後絵おついていき隣に立つと、透明な壁の向こうには小型のワニのような大ききで、でもそんなにいか

ついで雰囲気は漂わせない、どちらかと言えばおおきくなったイグアナのような動物が、オレンジ色のライトに当たってスヤスヤと心地よきそうに眠っていた。

「俺さ、あいつがこの世界の生き物の中で一番好きなんだ。ずっと見ていられる」

視線は外さずにそうつぶやく彼に、私は親のようなほっこりとした気持ちになる。

「かわいいねえ」

私その言葉を彼はミズオオトカゲへのものだと思ったのか、彼はトカゲたちのウンチクを語り始める。

私がかわいいって思ったのは、トカゲじゃなくてあなたなんだよ。

そう思いながら、私はうんうんと頷いて彼の話聞いた。

○

青井君とはあれからわざとらしく何事もなく接して、ほどなくして夏休みがきた。

最後の留学のチャンスだと言われたため、私は親に頼み込んで二、三か月の予定でイギリスへと留学した。

イギリスへは何度も行ったことがあるが、やっぱりあのどんよりとした空といい、みんなが自信をもって生きている感じといい、第二の祖国にいるような気分になる。

いつものホームステイ先にお世話になりながら、大学が半分以上出してくれる長期留学を私は心底楽しんだ。

留学を決意したのは、彼らに会いたくないのもあったのかもしれない。男と、距離を置きたかったからかもしれない。

それでも、会社の説明がしたいと太陽からメールが来るまで、私は日本のことなんてまるっきり忘れていたのだった。

二、三か月の予定が五か月近くもイギリスに滞在してしまい、ホームステイ先には迷惑をかけた。長居してごめんなさいと謝ると、もっといいのにと落ち込まれた。このホームステイ先には何度もお世話になっているが、就職したら簡単に外国なんていけない。私はホームステイ先の家族とおいおい泣きながら、ひとりイギリスを去ったのだった。

十二月の寒さをかみしめながら学校に戻ってきて、校舎なんかよりも先に目に飛び込んできた最初の光景は、いつまでいるつもりだったんだとものすごい剣幕でまくしたててくる瑠奈と菜々子だった。

「もう、このまま亡命するんじゃないかって心配だったんだから！」

「遥がない間に、私たちちゃんと就職決まったんだよ、ほめてほしかったのに、なんで遠くに行くっちゃうの！」

わあわああと叫び散らかす二人にごめんごめんと謝る。そうして時差という名の眠気と闘いながら

講義を終え、いつもの喫煙所に向かう。

扉を開ける刹那、彼がいたらどうしようかと思つたが、時すでに遅し。

「久しぶり」

今日の授業はたまたま何もかぶつていなかった彼が、元氣そうに手を振る。

私も手を振り、変に避けるのもよくないので平然を装つて隣に座る。

「イギリス、どうだった？」

私が何度もイギリスへ行っているのを彼は知らないのだろう。私は何回も行っていることを先に伝えつつ続けた。

「やっぱりいい。でも、住むとなるとなんか違うの。半年ぐらいの留学が一番いい」

そういうと、そんなもんかと彼は楽しそうに笑つた。

うんと私があなずいてから、気まずい沈黙が流れる。私が最後のひとくちを吸っているとき、彼がおもむろに私のほうを向いた。

「覚えてないかもしれないけどさ、俺教室で倒れた時あつたじゃん」

「うん」

「誰に運んでもらつたか覚えてないんだ。でも、余計なことを口走つた気がして」

パーソナルスペースに踏み込んでくるかのように顔を覗き込んでくる、熱に浮かされたようなぼうつとした彼の表情は、確信的に欲情しているようにも見て取れた。



「ねえ、あの時俺を運んだのって」

「磯田君よ」

「へ」

私は顔を九十度右方向へと背け、たばこをそそくさとポーチにしまう。

「でも磯田、違うって言ってたし、あの日は確か就活」

「いいえ、ちゃんと講義に出ていた。気を使って違うって言うてるんじゃない？」

白々しい嘘。そんなの彼が一番わかっているのだろう。でも、深入りはしてこないし、詮索をやめたように目を細めて彼はため息をつく。

「なら、そういうことにしようかなあ」

わざとらしい含みのある言い方は、まるで嘘っぽくて、それでいて私の深いところにチクチクと針を刺してくるようだった。

「しといて」

太陽みたいにひどくぶっきらぼうな声が、私の喉からこぼれた。

○

イギリスから帰国することになった、本来の理由。

「えーっとね、来年の新入社員である子は二人！ 遙ちゃんと、高卒で雇った修也くん！」

豪快な太陽のお父さんと男の子と私の三人は、会社の談話室でお茶をすすっていた。

「神木遥です、よろしく願います」

私がぺこりと頭を下げると、目の前にいる男の子も深々と頭を下げた。

「矢崎修也やまきしゅうやです、こちらこそよろしく願います」

まだ初々しいあどけない顔に、サッパリとした短髪。曇り一つない眼鏡にキリリとしまったネクタイ、ほこり一つない制服のブレザーがまぶしい。私にもこんな時代があったなあとしみじみと感じる。

「じゃあね、今日は会社説明ということで。これからよろしく！」

元気な挨拶から始まった入社のための会社説明会は、思っていた時間よりもすぐに終わった。

元来長い話があんまり好きではない太陽のお父さんだ、時間が短くなることはよくある。

ありがとうございますとお礼をして帰ろうとすると、矢崎君が待ってと告げる。

「神木さんって、社長さんの息子さんと付き合ってるって聞いたんですが」

眼鏡をくいっとあげてニヤニヤと口角を吊り上げてくる矢崎君は、なんだか気味が悪かった。

「やっぱり、玉の輿が目的なんですか？」

彼の言葉に、私は今の言葉は何だと耳を疑った。

「ちよ、それは失礼なんじゃ」

「失礼だと思ったのなら謝らせてもらいます。なら、息子さんの好きなどころはどこですか？」

談話室で始まった突然のバトルに、太陽のお父さんはあわあわと口に手を当て主婦のように慌てふためく。

「なんで黙っているんですか？」

「ここで話すようなことじゃないでしょう？」

「成程、やっぱり玉の輿に乗るのが目当てで」

「そんなこと、一言も言っていない」

正直に言ってしまうえば、玉の輿以外の何物でもなかった。太陽は車も持っているし、そのうち会社を継ぐし、両親も優しい。

でもそんなことは、口が裂けても言えないのだ。

「うーん、やっぱり私には玉の輿に乗らざるを得なかったような、そんな気が」

「おい」

聞きなれないドスの利いた低い声に、だれかと思いのした入口のほうを向くとよく見知った人が顔中のしわというしわを眉間によせて立っていた。

「おや、あなたは？」

「昼飯食べようって親父呼びに来たら、なんか言い争ってるし」

ため息をついた後、太陽はずかずかと矢崎君のほうへ歩き、彼の胸ぐらを思いきりつかむ。

「人の女になに抜かしてんだ」

今まで聞いたことのないひっくり声に私が驚いていると、矢崎君は全く懲りずにひょうひょうとして質問する。

「これは失敬、して、あなたは誰です？」

今まで話していた内容的にわかるだろうと私は彼の理解度に疑問を感じていると、太陽は手を放して私の目の前に立つ。

「その話題の中心人物だ、バーカ」

そう言い放って、太陽は私の手首をつかんで談話室を後にする。

「ちよ、太陽」

慌てるように名前を呼んでも、彼が早歩きをやめることはなかった。

○

あの後腕をひかれるままにどこかに連れていかれて、ついた先には何度かお邪魔したことがある島崎家のリビングダイニング。私はそこに置いてある座布団の上に座らされていた。

「あの、太陽？」

ちゃぶ台の向こうに同じように座布団の上で胡坐をかく太陽は、今までの中でもあまり見たことのないほどにぶんむくれて携帯をかまっており、機嫌が非常に悪かった。

「ねえ、あの子も悪気があったわけじゃないと思うし、単なる好奇心だよ」

なんとか機嫌を直してもらおうと私は顔をうかがうものの、じろりとにらまれたことによって私は肩をすくめる。

「ゾ、ゾ、めん」

目に見えるように委縮し、しゅんとしていると太陽が立ち上がってどこかへ行く。向かった先は死角であるキッチンのようで、冷蔵庫から何かを取り出し水道をひねり水がシンクに流れる音が聞こえてくる。

少し時間がたったと思うと、彼はフォークに小皿と何かが入った透明なケースを持っていて、よっこいせとまた正面で胡坐の体制に戻る。

「ん」

たった一文字とともにテーブルに並べてきたのは、きらきらと輝く大ぶりの赤いイチゴだった。少しばかり残る水滴が宝石のように輝いていて、幸せがひしめき合っていた。

小皿には練乳と砂糖が盛られていて、どっちでも食べられるようになっている。

「いちご、好きだよ」

頬杖をついて携帯に目をやったままそう答える太陽のやさしさに、彼への不信感でいっぱいだった心がほどかれていく。

「うん」

ほわほわと穏やかな気持ちで食べたイチゴは、口に含んだとたんにも果肉がばあっとはじけて、甘みと酸っぱさがちょうどよい比率で伝わってくる。

あまりのおいしさに思わず笑みを浮かべていると、ちらりとこつちを見た太陽が少し笑ったような気がした。

その後、あのイチゴは福岡産の超有名なあまおうだということが判明し、もっと味わえばよかったと私は後悔するのだった。

○

少しずつ変わっていったのは、三年以上経ってから。

私も大学に行って、彼もお父さんが経営する会社で働き始めた。親にも紹介され、お母さんと連絡先を交換することにもなった。

ここまでは順調だったし、喧嘩だってしたことがなかった。

仕事をする社会人と、自分の学びたいことを学ぶ大学生。

学生と働く人間の価値観は、違っていた。

まず、めっきりメールのやりとりが減ったこと。

太陽はそもそも、今はやりのメッセージアプリやSNSをやっていない。機械音痴なところがあり、

一回試しにやってみたことはあったものの諸々のデータがすべて吹っ飛んだ。それから、私たちの遠距離でのコミュニケーションはすべてメールでまかり通っていた。なので、仕事頑張るとかお疲れさま、おはようからおやすみまで、私は彼とやり取りをしない。

彼がその間にほかの女のところへ行ってしまうとかも一瞬よぎったが、まあ行ったら行っただと私は高を括っていた。もうこの時点でかなり冷めていたのかもしれない。

次に、デートの行き先は気づいたら全部私が決めていた。

別に彼を責めるわけではない。仕事で忙しかったりするのもかもしれない。でもせめて、場所の提案くらいはしてほしかった。

「次、どこに行きたい？」

場所選びに詰まった私が、デートの帰り際にこうつぶやくと、彼は明後日の方向を見ながらこうぼやいた。

「どこでも」

そこには、最初の頃の遥と一緒にならどこでもいいという意味はなさそうだった。ただ居心地がいだけ。もう私は離れないだろうという、緩みきった頭。反発しようにもどうせどこか遠くを見たまま目も合わせずに聞くんだらうなと思ってしまう。

「そっかあ」

空虚な声が私の心に響く。

もう連絡しないでおこう。

当時大学三年生だった私は柄にもなくそう誓ってしまったのだった。

○

チュン、チュン。

窓の外からこぼれてくる鳥のさえずりと朝日と共に、うつぶせに寝ていた体をゆっくりと体を起こす。

んん、と唸りながら起き上がると黒い髪がカーテンのように重力にしたがって、ぱさぱさとマットレスの方へ垂れ下がる。

その動きとは真逆に目の前のデジタル時計を見て、私はため息をつく。

今日は、一月十七日。

二十二回目の、私の誕生日だ。

誕生日とはいえ、いつものように学校はある。単位が全て取れているからと言って、休むわけにはいかない。休みぐせがついたら社会に出たとき大変だ。

朝ご飯を適当に食べ、昨日から着ようと思っていた小洒落たワインレッドのニットワンピースを来て、黒いタイツを履く。



髪は適当に毛先を巻いて、化粧はいつもよりもちょっと濃いめの赤のアイシャドウに一点して愛らしいピンクのリップ。

グレーのチェスターコートを羽織れば、今日も一日が始まる。

家を出て学校について、今日も授業を受ける。お昼休みになって、いつものメンツから祝福の言葉が寄せられた。

「暁、誕生日おめでとう！ これ、安物だけど」

瑠奈が渡してきたのは、手提げの所に赤いリボンがついた、手乗りサイズの小さな白い紙袋。

その場で開けてくれというリクエストに促されるように中身を取り出すと、そこには高貴な雰囲気漂わせるルージュが入っていた。

「遥に似合うと思ったの！ 色はワインレッド、見た途端に一目惚れしちゃった」

「すごい、とってもキレイ、ありがとう！」

はにかみながらそう言うのと、いいよいいよと胸のあたりで軽く手を振りながら微笑まれる。

「じゃあ私も、これ！」

菜々子からは三十センチくらいの一般的な大きさであるラッピングボックスが渡された。包装紙は桜のような色のピンクで、とてもかわいい。

これもまた開けてみてということにより、惜しげもなく包装を剥がしてやる。中からは、化粧水とパック、それに入浴剤のセットがところ狭しと詰め込まれていた。

「遙ちゃんの可愛さに、磨きがかかることを祈って。なんまんだぶ」

「えー菜々子すぎい量！　なんかごめん、私こんなちっちゃいので」

「いいのよ、気にしないで」

二人を宥めながら貰ったプレゼントをしまっていると、菜々子あんたすぎいわと瑠奈が菜々子をこれでもかと褒め称えはじめた。

私は手を付けていなかったお昼ご飯を食べようとすると、ポケットで携帯がブツと揺れる。

通知が入っていることを確認し、誰からだろうと思うと意外な人物からメールが来ていた。

学校終わったら迎えに行きます　裏のコンビニで待ってる

太陽

仕事終わりに来るつもりなのか。

今までろくに祝ってくれたのなんて、三年前が最後だったくせに。去年はお前の好きなもの買うから選んで、って感じだったのに。

そのほうが気軽にいいんだけどなど思いながら、私はわかったと返事を返した。

○

時刻は夕方になったところに講義は終わり、荷物をまとめていつもの三人で外に出る。

「じゃあ、今日は私こっちから帰るね」

そう言っついても行く道とは逆方向を指さすと、菜々子は察したようににやにやとして、瑠奈はきよとんとした顔をする。

「あれ、遙今日はそっち？」

「んー、ちょっと用事があった」

「そっかあ、じゃあまた明日！」

「おめでとーバースデーガールー！」

二人にぶんぶんと手を振られ、私も軽く手を振る。男子高校生のように指先でつんつんと突ついたりしてちょっかいを掛け合いながら帰る二人を見送り、私は後ろを向いて歩き出す。

学校が終わった後に彼と会う時は、いつも裏のコンビニで待ち合わせだ。もつとも、私の学校が終わってからどこかへ行くなんてことはめったにないが。

大きめの道路を通っているうちに待ち合わせ場所のコンビニが見えて、一番左隅の駐車場に青色のスポーツカーが見える。別に足取りを早めることもなく、私は車の助手席のほうに近づいた。

「おーい」

仏頂面の男に、うっすら空いている窓から無愛想な声で話しかけると、彼は身を乗り出して助手席のドアを開けた。

「乗って」

何日ぶりの会話だろうか、と思いながら私は無言で助手席に座った。

扉を閉めると同時に、私は慣れた手つきでシートベルトを締める。それは彼も同じで、彼も慣れたように目的地など言わず車を走らせた。

車内に響く、今世間で流行っているポップス。時々かかる急なブレーキ。でもそんなのは慣れたことで、向こうは前を見つめ、私はたまに彼の横顔を見つめながら、車は進んでいった。

遅い時間ということからか、その後すぐに行きつけのバーに着き、車を降りた。

カウンター席に二人して腰掛けると、マスターに今日誕生日だったよね？ と微笑まれ、サービスだよとノナルのオレンジカクテルを一杯いただいた。彼も運転手ということから、ノナルを無心で飲んでいた。

私は時折バーのマスターとおしゃべりしながら、つまみの生ハムチーズをつついた。

彼はナッツの盛り合わせをポリポリとかじっていた。

いつもこうだ。いつも、私ばかり話して、わたしばかり、永遠同じことの繰り返し。

カクテルを飲み干し、誕生日にまで同じことばかり続くんですかと沈んだ気持ちでいると、いつの間にかお会計を済ませていた太陽に次ぎに行こうと目で訴えられる。

どうせ帰るんだろうと肩を落として、私はさっきと同じように車に乗る。いつもの角を曲がって、いつもの信号で止まって、この道を右に曲がって。

でも太陽は、いつもの曲がる道ではない方向へと車を走らせていた。

「帰る方角、こっちじゃなくない？」

私は少しうろたえながら聞いても、彼は何も言わずに運転を続ける。

「ねえ」

意味の分からない太陽の行動に本当は掴みかかりたい気分だったが、相手は運転中だ。自分の危険を晒すようなマネはしたくない。おとなしく黙りこくっていると、砂利まみれの駐車場に車は止まって、彼は黙って車を降りてしまう。

追いかけるように私も降りて、ずんずんと先を進む太陽の後を追う。周りは暗くて、街灯も二メートル間隔でしかないような道を、白い息を吐きながら一列に進む。

ヌツとロボットのよう動きを止めた太陽の横に立って、私は周囲を見渡す。

「え、ハハハ、どハハハ」

「遙」

唐突に呼ばれた名前に、私ははっとして彼の方を向く。

「ソコ、俺達が高校生の頃によく来た、あの川なんだけど」

そう彼に言われて、ぼつぼつと高校生の頃の記憶が戻ってくる。

「あ、ああ、だいぶ様変わりしたわね、なんか整備されてる」

高校の頃、帰るときに少し遠回りをしようとか言っておこを二人で歩いた。帰り道に、デートっ

て言いながら、手を繋いで。

暑い日には川に足を入れて、パシャパシャと水を蹴ってきらきらとした水の反射を楽しんだ。

あときは、ちゃんと会話ができていたのにな。

「遥」

川の流れを見つめながら、私は耳だけを彼に傾けた。

「あの」

いきなり彼がうづくまるので、どうしたのかと視線をそちらに向けると、彼は懐から何かを取り出して、跪いていた。

「俺と、結婚してくれないか」

開かれた小さなケースの中に入っていた、より小さな、それでいてきれいに輝く、星色に光る指輪。

ガーネットが大きく真ん中にあしらわれたそれを見つめながら、私は戸惑い右足を一步後ろへと動かしてしまふ。

「なんで？」

震えた声で聞くと、彼は私が感動していると思ったのか、はにかんで照れながら話し始める。

「遥は優しいし、長いこと付き合ってきて、俺のことよくわかってくれてるし」

唇を噛み締めながら、彼は続ける。

「その、将来を描けるのも、遥だけだって」

「やめて」

切羽詰まるような声が出てしまい私は思わず両手で口を塞ぐが、私の呂律は踊るように回りだし、止まらない。

「今更何？ いつもいつもいつも私がデートここ行こうとか今日はこんなことがあって話してるのに、あなたはうんともすんとも言わなくて、私が何を思ってたかとか絶対わかかってないでしょ？ わかってないからこういうことするんでしょ？」

滲んでくる視界に、絶望したような喪失感を含んだ表情の彼が映る。

「私は優しい？ あなたのことをよくわかっている？ 笑わせないでよ、私はあなたのことを好きなのかすらわかんないの、私は最近のあなたを見てると辛いし苦しいし何も話してくれないしで、もう、うんざりなのよ」

時々何かがこみ上げてきて、ん、うん、と喉を上下させながら私は続けた。

「あなたが、好きだって言ったのに、あなたから、つきあってっ、て、いったじゃ、ない、それなら、責任とって、ずっとやさしくしてよ、わたしにもなにか、なにか、なにかほしいよ」

そこで私の視界は暗くなった。

いや、暗くさせられたらというべきか。

「きわったの、なんねんぶり？」

「ごめん」

私は、彼の胸の中に顔を埋めていた。いわば、彼に抱きしめられている形だった。

「ごめん、ずっとそんな風に思わせてたなんて、俺、知らなかった」

そりゃあ言っていないからねと言わんばかりに鼻で笑うと、私の頭を抑える彼の手の力が強くなる。

「ごめん、ごめん、ごめん、俺、俺、俺」

ぎゅうぎゅう、と強くなる彼の力。彼がちゃんと生きていくというのが、まざまざと私の体にインプリントされていく。

「もう一回、やり直せないかな？」

ずび、ずびと鼻をすする音がリンクしていく。彼も泣いているようだった。

「うあ、あああ、あああ」

私は、報われた思いを背負って彼を抱きしめ返した。

その後、どっちから漏れてるのかわからない泣き声が、周囲に響いた。

泣いて泣いて、泣きはらして、私たちは元の場所に戻ってくる。

「結論を今言うことは、でき、ない」

まだ鼻水がたれてくる。二人してめそめそと泣きながら戻ってきた太陽の車の中で、人差し指で鼻先をこしこし拭いながら、私は震えた声でため息をつく。

「でも、あなたから離れることも、やっぱりできない」

正面を見据えながら、ずびびとはしたくない鼻吸い音をたてる。



「今すぐにごうしますとは言えないけど、やっぱりあなたのこと」

私が主張を述べていると、彼の右手がヌッと視界に伸びてくる。頬に手を添えられると、勢い良く右斜め上を向けられる。

そこには彼の顔があり、私は目を瞑る間もなく彼からのキスを受けていた。

「俺の家、来て」

唇を離れた彼の顔は、アルコールを摂取したかのようにほんのりと紅かった。

○

彼の家について、ご両親は良くしてもらっている会社が開いたパーティーだかなんだかでないのと聞いて、そうなんだと呟いたとき。

車の中でしたつえばむようなキスではない、もっともっと、鮮烈で、それでいて熱狂的な、熱い唇と舌が私を襲ってきた。

私も答えるように動かして、お互いの粘膜を混ぜあわせる。何年ぶりなんだろうか。そんなの忘れた。溶けるように熱く、それでいて噛み付くようにじんじんするキスは、今まで太陽とした中で一番と言っているほど気持ちよかった。

それからお互いちょっとクールダウンして、初心な気持ちで別々にお風呂に入って、ぎこぎここと

ぎこちない体を動かしながら、体を求めあった。

彼の手が私の肌を滑って、同じように私の手が彼の肌を滑った。二人して同じような高い声を口から漏らして、私達はタイムラグと、今までの思いも、何もかもを一気に混ぜたような、そんな繋がりをした。

二人で果てて、冬なのに汗びっしょりになりながら二人で眠って。

朝起きてすぐ、寒すぎてタイマーで切れたエアコンのスイッチを入れ直した。

今日も学校だというのに、どうにもこうにも腰が動かない。その後太陽も起きて、俺は有給取ったから大丈夫、遥も単位取れてるんだろと言われ、たまにはいいかと私は学校に休む連絡をし、瑠奈たちには生理痛だと言いつ事を休んだ。痛む場所は合ってるのだからいいだろう。

菜々子のゆっくり休んでねという一言メッセージが、なんだか心に罪悪感を湧かせた。

「どこか行く？」

そう太陽に聞かれて、行けるわけ無いでしょと突っ込む。すると太陽はごめんごめんと苦笑してきて、本当に反省してるのか元凶がと心の中でキレた。

その後二人で映画を見たりして、久しぶりに一緒に家でゆっくりした。夕方になって、送ってくよと車を出してくれた太陽の顔は、そろそろ両親が帰ってくると訴えていた。

太陽が家まで送ってくれて、ありがとうと言うと、あつと彼は呟く。

「なに？」

私が首を傾げると、太陽が私の頬に唇を落としてくる。

「やっぱ、ちゃんと喋る関係のほうが好きいな」

へらへらする太陽を、馬鹿！ と私は叫んで鼻をつまんでやった。

そして家に入って部屋に戻って、両親から太陽くんと一緒だったのねとニヤニヤされ、否定も肯定もせずにはあとため息をついた。

その後夜ご飯を食べることもなく、私はとろとろと眠りに落ちてしまった。

○

もう単位が取れるということから、学校では人の姿はまばらだった。

最後のレポートが終わらない、助けて遥という瑠奈からのレスキューを聞いて、私は学校に向かう。

自習室にいますと敬語で送ってきたメッセージをたよりに、私は瑠奈がいる場所へと向かう。

「瑠奈。来たよ」

自習室を開けると、他の生徒も終わっていない人が多く、神木さんだ、久しぶりと声をかけられる。

確かにあの休んだ日から三連休を挟んで、みんなに会うのは久しぶりだった。

「なんで誕生日の次の日休んだのよ」

瑠奈の隣に腰掛けると、タコのように唇をとんがらせて彼女がたずねてくる。

「はーい詮索しない、ラストレポート、ラストスパートよ」

「どうせ彼氏でしょ……はあ」

「うるさい、帰るよ」

「ごめんごめんごめんごめん！ 助けて！」

調子のいい瑠奈に、鼻で笑った後にレポートを手伝う。

ここはこうしてと教えているときに、ねえ神木さんと同級生の男の子に話しかけられる。

「あのさ、卒業式のあとに二次会やるんだけど、来る？」

卒業式は三月の頭にあつて、もうそんな時期かと私は頷く。すると肯定の頷きだと勘違いしたのか、男の子はぱっと顔を明るくする。

「神木さん来てくれるの！」

「え、あ、えっと」

「嬉しいな、よしよしそういうことなら青井、お前も来るよな！」

「なんでだよ」

青井君は男の子の後ろでレポートを書いていて、私にとっては死角だった。彼は頭をガリガリと掻きむしって、わかったよとぶっきらぼうな返事をする。

「すぐに帰るからな、お前が来なきゃ首吊るーとか縁起でもないこと言うから」

「っしゅー！ ありがとう神木さん、恩人だよ！」

なんの恩人なんだろうかと頭を抱えると、瑠奈がレポートは助けてくれないのかとじつとりとした視線を送ってくる。

「瑠奈は二次会行くの？」

不機嫌になる前にそう聞こうと思って話しかけると、間髪入れずに瑠奈は答える。

「行くよ！ だから遥が来るって聞いてテンション上がったけど、でも今はレポート終わらないしで感情がぐちゃぐちゃで」

「はいはい卒業するためにレポート書こう！ みんなも書いてよ！」

みんなにそう発破をかけると、おおと歓声が上がると、妙に体育会系な人が多くて助かった。こういう掛け声はとても元気に対応してくれる。

歓声の中で青井君と目があって、私は微笑む。青井君も、ニヤッと口角を上げてくれた。

その後、瑠奈のレポートは提出時刻の午後五時ギリギリに終わり、私まで教授にべこべこと感謝の意味を込めて頭を下げた。

○

一か月、メールも送らずデートの誘いもせずという日々が続いた。連絡を絶つと決めたのは自分なのに、いなくなったらいなくなつたでむなしく感じる自分もいて

反吐が出そうになる。

そして現実は無情にも、就職活動という新しい難問を突きつけてくる。

いところが就活難民になっていたのを目の前で見て聞いていた私にとっては、とうとうこの日が来てしまったかという落胆の瞬間だった。

毎日のように探す求人。書いても書いても終わらない履歴書、悪いところしか指摘されない面接。ふとした瞬間に恋人である太陽にすがりたくなってしまうのも、苦痛だった。

死にたくなるような矛盾を押し殺して生きるのも、限界だった。

そんなある日、太陽から一通のメール。

うちの会社来て。父さんが社員を求めてる。 太陽

求められている、と聞いてはテンションが上がらないわけがなかった。

いつもよりもきれいに履歴書を書いて、いつもよりもしっかり身なりを整えて。

見慣れた太陽の自宅兼本社オフィスの前で、太陽はスーツを着て待っていてくれた。

駐車場に並んだ見慣れない小ぶりなスポーツカーに疑問を感じて私が尋ねると、太陽はあっけらかんとした声で話す。

「言ってなかったっけ、俺車買った」

聞いてないよと首をかしげると、がっはっはと大きな笑い声が聞こえてきた。

声の下玄関のほうを向くと、太陽のお父さん兼会社の社長様がじきじきにでむかえてくれた。恰幅のいい体形は、どっちかというど細身の太陽とはあまり似ていなかった。

「すまんね遙ちゃん、太陽は事後報告をする癖があつてな。わしらにも内緒でこの車を買ってきたんだよ」

開いた口がふさがらずに太陽のほうを向き、私はゆっくりと口を動かす。

「助手席に乗るのは、わたし？」

「まあ」

照れたようにそっぽを向いて答える太陽に、私は心のモヤモヤが須古井軽くなったような気がした。

「それ以外ありえんだろう、わっはっは！」

実に楽しそうなお父さんに仕事の詳しい話の中で入ってからしようと言われ、談話室に拉致される。

茶色くて重厚感漂うソファにお父さんはどっかと座り、私もその正面のソファに失礼しますとつぶやいた後にちょこんと座る。しれっと太陽も私の隣に座ってくる。これじゃあ結婚の挨拶をしに来たみたいじゃないか。

「よし、二人の仲が良好というのも良かったし、改めて遙ちゃん、うちで働かないか」

「いいわねえ、遙ちゃんが来てくれたらおばさんもうれしいわあ」

お茶を入れてくれた太陽のお母さんが、にんまりと楽しそうに笑う。

「あ、え、でも、固定給とか、そういうのは」

そう私が危惧すると、お父さんは求人票をスツと私の前に差し出してくる。

「いい話だと、思うんだが」

おずおずと受け取って内容を確認すると、そこには就職センターの先生もびっくりの好待遇が記されていた。

まず、福利厚生 of 圧倒的充実感に、残業時間は会社のルールで二、三時間以内。賞与も年二回あり、なんとというか、それはそれは素晴らしい待遇で、語彙力をなくしてしまうほどだった。

キラキラと輝いてみえる求人票を見つめっていると、ご両親はにんまりとした笑みを浮かべる。

「ちなみに太陽は三年以内に出来る子会社の社長になる予定なんだ」

これは畏なんじゃないかと呼べるほどの情報量に息つく間もなく太陽のほうを向くと、ふふんと誇らしげな表情を浮かべられる。

就活という地獄からわれ先に脱出できるというのを理解した途端に、体が勝手に深々と頭を下げた。

「よろしく願います」

ああ、私は欲深い人間だ。



彼のことを好きかどうかすらちゃんとわかってないのに、目の前に出された餌にかじりついて。

こんな自分が、嫌いだ。でも、もう元には戻れない。

周囲から見れば、ひどく最低な女なんだろう。安定した未来にすがって、そのためなら手段を選ばない女に見えるんだろう。

でも、こんなにいい待遇、残りの人生きつとそうそう見つからない。

彼と別れる材料がなくなった私は、あきらめたように笑うのだった。

○

卒業式はつつがなく終わった。

瑠奈と菜々子と袴を着て三人で担任の先生と写真を撮って、これからも元気でなと背中をたたかれた。

すぐに両親と田舎に帰ってしまうために、二次会に参加できない菜々子がびえんびえんと泣きはらし、二人とも元気でね、お盆休みとかに絶対また会おうねとひしと抱き着いてきた。

そうしたら瑠奈がもらい泣きして、もちろんだよと再会の約束を交わしていた。かく言う私もかなり泣いていたけれど。

男の子たちは俺たちはまたすぐに会えるだろうと思っっているみたいで、そんなに泣いている人はい

なかった。それよりも笑顔の印象が強かった。

青井君は、すました顔で代表として卒業証書を受け取っていた。海外で仕事することになったんだ、代表として選ばれてもおおかしくはない。

「青井、かっこよかったぞ！」

「俺、お前と友達やっててよかったぜ！」

熱く肩を組みあってよくわからない歌を熱唱し始める友人たちに、青井君は終始困惑気味だった。落ち着けとだめだめている彼の困ったような顔を、私はぼんやりと眺める。

「よっしゃ、次は二次会だー！」

そう高らかに宣言した幹事の男の子を筆頭に、私たちはカラオケボックスへとわらわら群れを成して進軍した。

○

袴から着替えて向かった二次会は、それはそれは大いに盛り上がった。

卒業ソングを歌ったり、彼女と別れてしまった男の子が大きな声で未練たらたらな失恋ソングを歌ったり。私も瑠奈に誘われてデュエット曲を歌ったが、自発的には歌わなかった。

それは青井君も一緒に、彼は酔いつぶれた子たちの面倒を見ることによって歌うことを回避して

いた。

「あれ、遥もう帰っちゃうの？」

瑠奈がもつとここにおいてよと言いたげな表情をするが、悪いが今私は恋の歌を聴くだけで心臓が破裂しそうなくらいに痛かった。

「うん、そろそろお暇しようかな」

私が帰ると知ったとたんに、みんな立ち上がって後生の別れと言わんばかりに手を振る。酔いが回っているのだろう、瑠奈が千鳥足でよろよろとハグしてくる。

「はるかあ、遠くにおいても元気でね！」

「瑠奈は職場近いでしょ」

そうなだめていると、瑠奈に触発されるかのようにみんな泣き始めたりありがたいがとういつもありがとうとわけわからないことを言ってきたりした。

「彼とお幸せに！」

誰から言われたかはわからないその言葉が、私の心にズンとのしかかってくる。

そういえばと青井君を見ると、彼はどこかトイレにでも行っているのか、荷物はあるけど室内に姿は見えなかった。

そのほうがいい。

変なことを口走らなくて、いい。

私はみんなに手を振ってカラオケボックスから出て、一人で歩き出す。

「神木さん？」

今一番聞いているいけない声、私の耳に響いてしまう。

「青井君、なんで」

振り返ると、コートを着てへにやりと笑う彼の姿があった。ああいけない。私は理性を保つために、ぎゅっと握りこぶしを作った。

「俺も帰るって抜け出してきちゃった、ああいうの苦手で」

「そうなの？ 楽しそうだったけど」

「うーん、大人数はちょっと」

苦笑いを浮かべる彼の表情に思わずきゅんとしてしまう自分がいて、奥歯を強く噛みしめる。

「いろんなことがあったね」

「そうだね」

顔は見ないように、前だけ見据えて歩いた。彼から何となく視線が送られては来るものの、やっぱり気にしないことにした。

「彼とは？」

「今日言った通り。大学出たら結婚して、私は次期社長の秘書。青井君は？」

目を見ずに聞くと、彼は押し黙ってしまう。余計なことを聞いたかと思わず顔を見ると、悲しそ

うな顔で彼は私に向かって顔を歪めるように微笑む。

「別れちゃったよ」

その一言は、私の脳をショートさせるほどの破壊力だった。

「どうしてって、言いたげな顔だなあ」

私が露骨に驚いたような顔をしていたのをみて、彼が頬をポリポリと搔いた。

「海外の就職が決まったって最後に報告したの、彼女だったんだ」

「どうして最後だったの？」

「反応が怖くて」

確かにいつも話す内容から鑑みるに、素直に祝ってくれるような良い反応をするとはあまり思えない。

「いざ話したら、なんで言わなかったの、なんで海外なの、行かないで、行かないで、って」

おめでどうよりも先にそれ言われたのは、さすがに堪えたと彼は笑った。

「予想はしてただけだね。いや、うん、実際されるときつい」

下を向く彼は苦虫を噛み潰したような、そんな虚しくも悔しそうな表情をしていた。居ても立っても居られないような感じで彼が歩き出し、私も隣を歩く。

「それで、別れたの？」

「その場でね。おめでどうよりも先にそう言うこと言っちゃうんだって俺が言ったら、錯乱しながら

もういい、別れるって。わかりましたーって」

はあ、と漏らしたため息が、白い息とともに夜の明るい繁華街に消えていく。

「もっと目に見える形で甘えてほしかったんだけどな、女の子ってわかんないや」

夜の暗さに反比例するようなネオンと街灯が、彼の輪郭を沿うように照らしていく。

「わたしも、わかんないよ」

彼がタバコを吸う時を初めて見たときのような美しさに、私のストップパーという名の理性が徐々に緩んでいく。

「本当にこれでいいのかって、ずっと一緒にいて後悔しないのかって、変わるって言うってくれたけど、信用できなくて」

カラオケボックスで瑠奈に勧められほんの少しお酒を飲んでしまったせいかわ、涙腺が緩み本心はむきだしに踊り始める。

「それは、本人に言った？」

「いえない、いえるわけがない」

子供のように髪をなびかせながらぶんぶん首を振ると、彼がやさしい顔をしてくる。

「神木さんは、やさしいね」

彼が足を止めて、私に向き合う。止まったらだめだとわかっているのに、私の足は歩みを止めてしまおう。

「悲しいくらい、優しい人」

それは無駄な優しきなんだと言おうとすると、彼の目元がぼんやりと潤んでいく。

「君が、俺の彼女だったら、何か変わったかな」

ずるい。

どうしてこの人は、欲しいことを後に言ってくるのだろう。

どうして、一番欲しかった時に言ってくれなかったんだろう。

「青井君」

また歩き始めた彼の名前を呼んだら、彼は柔和な顔でこっちを向く。

「私を」

優しい顔が、困ったように歪んでいく。その歪み方が、涙によっての曲がり方なのか、はたまた彼の感情なのかは、もうわからなかった。

「わたし、を」

抱いてほしい。

ハグじゃない。ぎゅ、で終わるような優しいものではない。

私が正式に誰かのものになってしまいう前に、あなたに、抱いてもらいたい。

「いいよ」

うつむいていると、ぼそぼそと聞こえてきた声に顔を上げる。

「はいよ」

彼の顔は表情こそ隠してはいたものの、劣情を孕んだような瞳は正直だった。

「きて」

手首を引っ張られ、私の心はズクッと音を立てて熱くなった。前を歩く彼がどんな表情をしているのか、私は考えるのをやめていた。

○

冬場なのに体が熱くてたまらなかった。

別に温めあわなくてもいいのに、私たちはホテルの部屋に足を踏み入れた途端にどちらかからもわからないハグをした。

「シャワーは」

「待てない」

待ってましたと言わんばかりの肉食獣のような瞳が、私をとらえて離さない。その綺麗な顔に不釣り合いな眼は、瞼を閉じて一気に距離を縮めてくる。

「立ちっぱなしは、いい」

や、という前に彼が噛みつくようなキスをしてくる。流し込まれる唾液と舌と欲情は、いともむ



なしく残酷で、熱い。

口腔を好き放題荒らした後に、堪能したかのように彼の口が離れていく。それと同時に、私の腰はかくんと機能を失い床にへたり込んでしまう。

「キスだけで立てなくなった？」

唇を自身の長い舌で一周するその姿にさえ、触れてもいないのにごくりと息をのんでしまう。

フツと鼻で笑われたかと思うと、私は彼に力任せに姫抱きにされ、部屋の中央にまざまざと見せつけるように配置されているダブルベッドへと投げ込まれる。

到底女を扱うような優しさなど何もないが、私の最深部は悲しいくらいに脈打つ鼓動が止まらなかつた。

「意識、飛ばさないでね」

右の耳元で囁かれるとともに、鼓膜のすぐそばで跳ねるような水音と快感が私に降ってくる。まだ前戯にもいっていないのに、すでにくったりとしてしまう。

そうしているうちに彼の手が服の中に滑り込んできて、私はひとつ小さく悲鳴を上げる。それが恐怖ではないというのは彼もわかっていたようで、頭を撫でられ唇にキスを軽く落とされた。

好きに服の中をまさぐられていたかとおもうと、すべての上着を一気に鎖骨付近まで上げられ、私は羞恥心で体温がカッと上昇するのを感じる。

「ふゆなのに、あついよ」

それはあなたのせいだと反論する前に、入ってすぐにしたような舌の絡めあい再開される。

二つの突起をピンっとはじかれると、はしたなく高い声が漏れる。それすら彼は楽しんでるよ  
うで、小悪魔のようにニタリと笑う。

「もう、いい？」

これ以上は抑えが利かないようで、彼は自身のモノに隔たりを被せたのちに、私の両足の間に体  
を近づけてくる。

タイツにスカートを履いていたのだがそれもまた一気に脱がされ、解するのもらないほどに濡  
れていたそこに、彼は自身を一気に封じきる。

律動とともに甲高い声が口から溢れる。彼も欲を隠し切れないようで、時折苦しげに喘いだ。

最初から早いその動きは初めての人には堪えられないかもしれないが、ガツガツとご馳走を惜し  
げもなく食らうような行為は好きだった。

「かみ、きゅ」

「やめて」

限界に近い彼が呼ぶのは、いつもの私の苗字だった。

私はそんな彼に、揺れる唇をかみしめながら強い否定の視線を送る。

「はるかっていって、わたしは、はるか、はるかって、よんで」

保健室のベッドで呼ばれた違う人間がよぎる。違う。今だけは、私を求めてほしい。今だけは、私

を彼女にしてほしい。

今だけは、この瞬間だけは、私を愛してほしい。

「はるか」

躊躇することもなく口から滑り落ちてきた声は、私に刺激という名の幸せを送るのに十分適していた。

「はるか、はるか、はるか」

強く強く抱きしめようとしてきた彼の細くしなやかな腕を、腰を起こすとともに迎える。座った状態で下から送りこまれる熱は、私たちの感情も揺する。

「いつき」

彼の肩に頭をのせて力なくそう呟くと、彼の背中に回されていた腕の力はより強く、離れがたいものへと変わる。

「は、あ」

反射のように彼の体が今日一跳ね、マネするように私の体も跳ねる。二人して絶頂を迎えたのは、中に疼く余熱が証明していた。

彼の肩から顔を離すと、肩で息をしている美少年の顔がゼロ距離で目に入ってくる。まぶしさに目がくらんで、呼吸を整えながらうつむくと、下からすくい上げるように唇を拾われた。

そうしてまた二人して布団に沈み、毛布も掛けずに抱き合いながら眠ってしまった。

青く白く、澄み切ったような冬のしんしんとした緩い日差し。

窓から入り込んでくるそのまぶしきと自室のものではないシーツの違和感に、眉間にしわを寄せると同時に目を開く。

「ん」

目を開けると同時に飛び込んできたのは、すでに服を着てニヤニヤしながら顔を覗き込んでくる青井君の顔。

「おはよう」

私は目玉が飛び出るほどに驚き、上半身を瞬時に起こして枕の上のほうまで後ずさりする。

「どうしたの」

わざとらしく聞いてくる彼に、私は何も言えず目を泳がせることしかできなかった。

「まさか昨日のこと、忘れ」

「忘れてな、ゲッホゲホ」

起き抜けに出した声はカサカサに乾ききっていて、私は思わずせき込んでしまう。

「わすれ、られ、ないよ」

右手を首に置きつつ喉の調子を戻すために咳ばらいをしていると、彼がふっと口角を上げた。

「シャワー浴びたら、行くぞ」

チェックアウトの時間が迫っていることに私は少し絶望する。

もう彼との時間が終わってしまう。ぬるま湯につかっているような、幸せで美しい時間が、終わりを告げていく。

私が切なくなっていることなどわからないのであろう彼は、ひとりタバコを吸っていた。

○

「電車、来たよ」

青井君は五分後に来る反対側の電車に乗るみたいで、見送ると言っただけで聞かなかった。

電車が来たら、私と彼は離れ離れになってしまう。

行かないでと軽率に言えたら、どれだけ楽なことか。抱きしめることができたなら、どれだけ幸せなことか。

遠くに見えていただけの電車は、あつという間に通り過ぎ、ドアが私の前に止まる。

プッシュという音とともに開いた扉に吸い寄せられるように、私は乗る。

じゃあねと軽く手を振る彼を、私はくしゃくしゃになったまぶたの中見つめた。

もう行ってしまふ。

もう行ってしまふ。

もう、もう、もう。

遮二無二手を伸ばした先に、彼の頬があつた。

ぐっと引き寄せて、私は唇を合わせた。

周囲は気づいていないみたいで、私がぱっと離すと、青井君は度肝を抜かれたような、素っ頓狂な顔をしていた。

「じゃあ、ね」

詰まる声で私と言うと、彼の顔もぐにやりぐにやりと歪んでいく。

扉が閉まり、発車するまで彼が何かを言おうと口をはくはくと動かす。

私は何も返さずに、笑顔を作って手を振った。

そう、こうやって、何事もなかったように、生きていけばいいだけの話。

ガタツと電車が揺れ、ゆっくりと動き出す。

笑顔を浮かべながら、目から溢れるものを拭おうともしないままに、私は手を振ることをやめた。かっつた。

電車の速度が速くなっていく。

彼の顔が見えなくなっていく。去り際に、彼は涙を拭ったように見えた。

私はよろよろと二人がけの席に一人で座る。周囲に人がいなかったのが唯一の救いで、私は一息つくとともにブーッと鳴って揺れる携帯を確認する。

ありがとう

愛してた

携帯が水没しそうなくらい、私は顔から液体を流す。

「ずるい」

とめどなくあふれていく言葉は、だれのためのものでもなく、自分自身のためのものだった。

「ずるいよ」

ひぐ、ひぐと肩が上下に揺れる。抱きしめられた温もりも、抱くことしか意識していないセックスマンも、虚しいくらいに短いピロートークも、このメッセージも。

「ずるい、ずるい奴だ」

人がいないのをいいことに、私は声を上げて泣いた。

カタンカタンと音を立てながら私を運ぶ電車の、最寄り駅までの長さが、酷く短く感じて、仕方

がない。

泣きじゃくる私の左手薬指の銀の塊が、やけに光って仕方がなかった。





所詮この世は  
ルッキズム

私は醜かった。

子供の頃なんて、髪を引っ張られ、指を刺され、けらけらと揶揄われる日々。

嘘もつかれた。衣服にだって、似合わないって笑われた。一人でいぎるを得なかった。

そんな私が、可愛くなって絶望するまでの話。

「ブスだね」

たった一言、その言葉が私の脳裏から離れなくなったのは、いつからだろうか。

私の容姿は、醜いのだ。

自覚し始めたのは、幼稚園の時。

誰もが憧れる白雪姫。やりたいと手を上げた私は笑われた。

そして誰よりも可愛いと言われていた女の子が選ばれた。

その子は本当に幸せそうだったのだ。私はその時、所詮この世はルッキズムだということを知った。

でも、彼女は本番当日にステージの端でわんわんと赤子のように泣き始めた。

「いやだ！ やりたくない！ こわい！」

クソガキ。

私の脳裏にはその言葉がよぎった。

私から役をもぎ取って、あれだけチャホヤされていたのに、なんでなんだ？

お前は、これ以上何を欲しているんだ。

お前、私のことなんてちっとも頭に入っていないくせに。

悲劇のヒロインになって、なりたくなかった。

ああ、可哀想。

私って、可愛くて、可哀想で、可愛そう。

三途の川に乗って、絶望の淵まで泳いでいきたい。

ああ、可愛そう。

あの時みんなで寄ってたかって馬鹿にしてきた時、お前は目をそらしてたよな。

まるで、私は悪くない。って。

私、お前の心が醜いと思うよ。

心の底から。

そんな幼稚園を卒業。小学生に上がった。

私の出身地は実質田舎であり、幼稚園から中学校までずっと一緒なのだ。

つまり、どれだけいじめられていても学年が上がっても一生いじめられるのだ。

指を刺されて馬鹿にされて、それが一生続く。

義務教育の間、ずっと。私はそんな世界で、生きていかなければいけない。

固定観念というのは恐ろしいものであって、「普通」ではないものはポロポロにいじめられる。

そして、「普通」の間は「普通」に生きていく。

私は、普通が嫌いだった。

普通に高校に入って、普通に大学に入って、普通に結婚して、子供を産んで、子供が自立して、老後になって死んでいく。

そんな人生が嫌だった。

私の人生はもっとジャンキーでナイトポップのようにイカれていて、ラムネのように弾けている刺激的な人生が良い。

私はそっちを選んだ。

平均八十点を狙う周囲と、点外百二十点を狙う私。

私は周囲から見たら「異端」で、いじめられた。

髪の毛を引っ張られた。物を隠された。消しゴムを粉々にされた。

そして、悪口もその一つに過ぎなかったのだ。

「不細工だね」

「かわいくないのにうるさい」

「気持ちわるい」

今となってはいじめのほんの少しのエッセンスにすぎなかったのかもしれない。

でも、その時かわいくて優しい女の子が周囲からモテていて、私はまたも気づかされてしまったのだ。

「所詮この世はルッキズム」

私は人生において所詮生きる上で大切なのは容姿だということを齢十歳程度で本格的に理解してしまった。

全てにおいて、容姿のいい者が勝って容姿の悪い者が叩かれる。

いじめは駄目だと言っている奴らの心なんて戯言。

そういうことを言う奴が、裏では散々人を揶揄して叩いていじめてくる。

そんな幼少期がろくに楽しいわけでもなく、私は中学三年生で不登校になった。

容姿至上主義の奴らがわんさかいるクラスに放り込まれて、精神を病まないわけもなく。

「このままイカれた教室にいたら、私の人生は潰れたものになる」

「こんな奴らに合わせるのは嫌だ」

私は、普通に染まるのを嫌った。

だからこそ、学校に行かなかった。  
でも、そうしたら今度は内申点が無くなっていった。

保健室と家を行き来するだけの日々。

そんな人生は保健室の壁のように平坦で、まっさらで、実に無の境地だった。

そんな私には気持ちの悪い存在がたくさんいたのだが、何より不快なのがこの正面で笑う男。

「——さん、今日も学校来れなかったねえ」

来てるじゃないか。

教室に入れなければ、この学校で生きる価値はないというわけか。

「ねえ、いつになったらこれそう？」

そんなことはわかりきっている。

あの南館の三階で笑う女達を殺してきてくれれば、私は元に戻る。

私はそう告げた。

するとなぜそんなことを言うんだと罵られる。

罵ったあと、肩を優しく抱かれて、頭を撫でられて。

外観だけ勝られたあとに、男はへらへらしながら帰っていく。

私は知っている。

保健室の裏に教師用の喫煙所があつて、奴はそこで煙草を吸うついでに私のところに来てい

と。  
担任だという地位を使って私の家まで無理やり押しかけてきたことだつて、自分もいじめられていたと言いながらも何もしいところも。

スキンシップが異常に多いのも。

私には、すべて、今こうして嘔吐する素材になるに相応しかつた。

すべて、夢であつてほしい。

悪い夢を見ているだけ。

寝ゲロと共に目を覚ますのだ。こんなゲロのような世界で生きているのは夢。目を覚ましてくれ、私。

なあ、起きろ。

起きろよ。

起きろ。



夢は覚めない。

夢は覚めないまま、私は中学を卒業した。

母親には「卒業式には出てほしい」と言われたが、結局校長室で直で卒業証書を買った。

悲しくてやりきれないような、複雑な顔をした母親の横で、私は満面の笑顔で中学校舎に中指を立てた。

「一生覚えてやるわ。バーカ」

私は本当にこう言ったのだ。

母親にやめなさいと怒られたけど、私はいつまでも覚えていてやる。

こんなクソみたいな夢を見せた、義務教育を。

義務教育に殺された、私の義務教育時代を。

高校に上がって、私の人生は徐々に幸せに近づいていった。

ヤンキーがわらわらしているような高校に通うことになった私だけど、ヤンキーはみんな優しく、隣のクラスの子とも、とにかく沢山、友達になった。

私は楽しかったのだ。

少なくとも、一年生のときは、楽しかったのだ。

私と彼は、高校生のクラスメイト同士だった。

背の高くて足も細くて、顔はソース顔の外国人みたいな顔の彼。運動もできて、優しく、いやに紳士で、頭も良くて。

斜め後ろに座っている彼の魅力に気づいたのは、高校に入ってからすぐのことだった。

「かわいいね」

ませた男だった。高校一年生で、陰キャだった私に彼が発した言葉。

私はその言葉で、ブスと罵られ続けた十五年間をひっくり返されたような気がしたのだ。

「ありがとう」

私は彼に笑った。そこから、ラインを交換して、文字でも言葉でもよく喋るようになって、お互いに過去を吐き出し合った。

「私は義務教育時代ずっとずっといじめられて、人を信用できない。ネガティブなの。メンヘラなの」  
空き教室で嗚咽をこぼしながら吐露した私の言葉を聞いて、彼は優しく頭を撫でてくれた。

「わかるよ」

彼は、私のことをわかってくれた。

「俺もそういうことあった。辛かったよね、苦しかったよね」

高校生とは思えない優しい顔で、私のすべてを肯定してくれた。

ああ、幸せだ。

ぬるま湯のような穏やかな関係は、私が無知なまま彼の家に行って一変した。

「家に行ったらゴーサインでしょ」

「家に誘うとかヤろって言われてんじゃん。いや、それに気づいてないお前も馬鹿」

その後、みんなに口々にそう言われた。

私は、彼と付き合ってもないのに一線を越えた。

その後私が「こんな関係おかしい」と彼に話したことにより、私達は恋人として一緒にいることになった。

ここから、歯車がギチギチと色を変えて錆びていった。

「学校では絶対に付き合っていることを隠すこと」

「家でしかデートをしない」

「重くないドライな関係でいること」

この条件を突きつけられた。

頭がおかしいだろう。本当は私は家以外でもデートがしたかった。水族館でイルカを見たり、一緒にお花見がしたかった。

でも、関係を崩したくなかった私は、黙って頷いてしまった。

こんな関係で楽しいわけもなく、彼の家に行く回数も徐々に減っていき、彼からのラインの数も減っていった。

付き合う前には喜んで食べてくれていた手作りのお菓子も、「俺甘いもの嫌い」という言葉で全て捨てることになった。大衆の前で彼に怒鳴られることが増えた。冷たい目を向けられることが増えた。でも、都合がいい関係って見られるかもしれないけど。彼は私のことが好きじゃないかもしれないけど。

私にとっては、はじめての彼氏で、はじめての恋が実った相手だったのだ。

私は、それでも彼から離れられなくて、彼のことが大好きで、依存していた。

ゆえに私は、黙ってすべてを受け入れていた。

半年ほど付き合ったある日。

彼は嫌いな先生に怒られていた。

数学の先生で、メガネをかけているおばちゃん先生。彼が宿題を出さないことに対して怒ってい

る様子だった。

金切り声で怒られていて、でも周囲はそんなこと気にも止めずに喋りながら授業課題を進めていた。

彼がふらりと私の元に戻ってきて、私は彼を慰めようとした。

でも彼は、私の頭に教科書を叩きつけた。

「あのクソババア、ふぎけんな」

先生に対する愚痴を淡々と吐き散らしながら、私を殴ってカバンを蹴った。

カバンにつくシューズの白い跡、私の頭にじんじんと浸透していく、叩かれる痛み。

私はやっぱり、そうだねそうだねと頷いてしまっていた。

でも、もう限界だったんだ。

その日、私の中で何かが決壊した。

「あなたが怖い」

私は泣きながらそう告げた。もう関わりたくなかった。関わろうとすると、手が震えて、目が潤んで涙が出て、酷いときは過呼吸吸気味になる。

そんな私を見て、彼はゴミを見るような目でこう言った。

「もう別れよう」

私は大好きだった彼に、大好きを殺されてしまった。

でも、私は悪あがきをするように、彼に一言だけ浴びせた。

そういえば、彼が私のことを好きになったのは身体だった。

高校生にしては大きな胸、ここがポイントだって言ってた。

私は愛嬌だと思って見逃してたけど、あれはひどかったな。苦しかったな。

五年が経った今も、別の男の人と付き合っている今も、私はふっと彼を思い出して恐怖で泣くことがある。

でも、そのたびに私が最後に発した、あの言葉を思い出すんだ。

「わたしは、あなたの風俗嬢じゃない、よ」

最後に彼に発したこの言葉は、脳裏にいやに焼き付いている。

彼は、極度のルッキズム思考であった。

「不細工はいらない」

「髪は短くしろ」

「胸はD以上は無いと駄目」

「デブは嫌い」

「俺より痩せろよ」

「きつしよい奴だな」

「ニキビあるよ」

「毛剃れや」

「化粧上手くできたら惚れ直してやるよ」

「ツイントール似合わないから解けよ」

それは、二番目の男だってそう。

「化粧嫌いだから落として」

「そのイヤリング大きすぎて俺は好きじゃない」

「俺静かな子がいいんだよね」

「俺から告白したから俺からは振らないよ」

「もう好きじゃない」

「俺を本気にさせてみる」

私はね。

君に愛されたかった。

女は愛されるためなら何でもする人種がいるの。

カオスだとかカスだとかのたまう人もいるけど、それはあなたが要求してきたこと。

それに、あなたが言ってきたことをやらないとあなたは拗ねるし殴るじゃない。

だから私は、

わたし。

誰が好きだったんだっけ。

あなたが好きだったんだっけ。

ちがうなあ。

わたしは、彼氏のいる私が見たかった。

わたしは、ぬるま湯の中でキラキラしている私が見たかった。

わたしは、幸せになりたかった。

あーあ。



気がついたら、私は彼らに百件以上の通話をかけていた。

毎回そう。私に頼んできた欲求、願い、その数の分の電話をかけて、その分の言葉をぶつける。私は悲しいんだ。

『私』じゃなくて『彼女』が好きなお前らが。

かわいいかわいい私に、鼻を伸ばしてやってくるその様が醜い。

お前らのほうが、醜いじゃないか。

私はお前らの奴隷じゃない。

私はお前らの奴隷じゃない。

私はお前らの奴隷じゃない。

スパイラルは、まだまだ続く。

私は周囲に人が絶えない。

でもそれと同時に、私の内観を知った人間は続々と離れていく。

残る人間も少数いて、違いは「相手に何も求めていない人」「期待とか考えてない人」が残る。

「相手とギブアンドテイク、むしろ欲求のほうが大きい人」が、離れていく人の層として多いのだ。

人に期待をするから、傷つくんですよ。

誰かに期待をするから、傷つくの。

期待なんてしなくていいのよ。

期待しないで。

そう思いながら、私は今日もだれかに望まれて愛想を振りまいて、勝手に幻滅されて、去られる。

地獄のスパイラルだ。

私に何も求めないでほしい。

私も何も求めないから。

ただそばに居るだけの人間は、どうして現れないんだろう。

何かを求められて、何かを返してほしげな目で私を見てきて、それで結局勝手に幻滅して。  
こんな人間しか、いないのか。

私はなんとなくそう思いながら、今日も家に帰って、お化粧を落として、お風呂に入って、眠る。  
特に誰かに抱かれることもない。恋人が尽きてから、本当に欲がなくなった。  
それと同時に、人の欲に敏感になった。

ああ、むなしい。  
むなしくて退屈な、そんな人生。

「それは周囲がしおりちゃんを穿った見方で見ていただけなんじゃないかな」

電話で告げた、あたたかくて、やさしくて、幸せになる声。

「しおりちゃんは好きなきことをして、頑張ってる。僕はそんな努力家なところが好きだよ」

友人の紹介で知り合った、一つ下の大学生である、三番目の彼。

彼とのルーティンとなっている電話はとつても穏やかになれて、朝の挨拶も楽しくて、本当に充実していた。

月一のデート、学校での悩み相談、サークルに入ったこと。

それと同時に、私も個人での仕事を始めたり、小説の仕事をたくさんし始め、デートのタイミングや電話等にずれが生じていった。

「お互いのために別れましようか」

そんな感じで、半年で友達に戻った。

特に特筆するようなドキドキしたデートなどもなかったし、スリリングなこともない。

でも、ただ黙って寄り添ってくれている、その存在感がお互いに心地よかったのだ。

私を「ただの人間の価値観」に戻してくれた三番目の恋人、いや、「初めてのちゃんとした恋人」には、本当に感謝している。

それと同時に、恋人からただ友達に戻って、彼に新しく恋人ができたという理由で連絡先を消しただけの関係がとでもさっぱりしていて好きだった。

塩顔で、くしゃっとした顔で笑う、お口の大きな彼。

本当に優しく、愛情深く、彼の横にいる私は「ただの女の子」になっていた。

恋人として気を使うことだってなくて、男女でのんびりしているような、そんな関係。

お互いに居心地が良ければそれでよかったのだ。

でも、仕事との両立がお互いに来れず、離れることを選択した。

本当に一筋の涙も流さなくて、終始笑顔だった。

私は彼のおかげで、人間に戻れた。

ぐちゃぐちゃに入り組んだスパイラルを俯瞰することができるようになったし、地獄の真ん中で  
のたうち回ることもなくなった。

私は、彼の愛と教えのおかげで傍観者となることが出来たのだ。

逃げることを学んだ。共に逃げて愛することを学んだ。

私には、ただ隣にいて、なんとなく付き合っ、なんとなく結婚して、なんとなくそばにいてくれるような、ふんわりとした関係のほうがちょうどいい。

ああ、幸せだ。

これに気づけた私が、私は大好き。

そして今日も、無欲のまま、幸せに包まれて、眠っていく。

朝六時。私の朝が始まる。

学校に行くために早起きして、昨日選んでおいた服を着て。今日は会社に行くから書類も入れな  
きやと、慌ただしくファイルをカバンにつめて。

そうして朝ご飯のゼリーを食べて、顔を洗って、歯を磨いて、ポーチを開けて化粧をする。

ふと、アイラインを塗っているときに、私はこう思った。

私は、誰のために可愛くなったんだろう。

メイクが上手になったのも、お洋服が似合うようにストレッチを続けるのも、愛想を振りまくの

がいやに上手くなったのも、誰のためなんだろう。

そして、そうやって可愛くなった私にだけ接触してくる人間のなんと多いことか。でもそんな私も皮肉なことに、化粧をしている私が大好き。

結局、私が一番、この世の地獄を具現化した人間なのかもしれない。

はからずも私は、男や中学時代やニュースなどで、これを知ってしまったのだ。

「所詮この世はルッキズム、なんですよね」



# 作品告知欄



本と、貴方の心を借ります。

「著」優詩織 「画」さくら怜音

(定価 330 円 (10%税込))

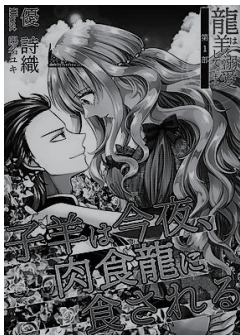
仕事を接点に、二人の男は恋に落ちる。

だが、物事はそう簡単に動くのか……

教師×図書館司書の現代 BL !



## 作品告知欄



子羊は今夜、肉食龍に食される  
「著」優詩織 「画」陽名ユキ  
(定価 495 円 (10%税込))

一目惚れしたので、拉致しました。

天然少女と肉食イケメンのとろけるよう  
な恋愛劇！

所詮この世はルッキズム  
優 詩織

---

2022年2月8日 発行

発行 名古屋デザイン & テクノロジー専門学校

印刷 オンデマンド

連絡先 [youshy1001@gmail.com](mailto:youshy1001@gmail.com)

---

無断転載・転記禁止